

国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第2冊

誉水中筋遺跡

2017. 3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局

序 文

本書には、国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市川東に所在する誉水中筋遺跡（よみずなかすじいせき）の報告を収録しています。

誉水中筋遺跡では、弥生時代から古墳時代にかけての自然河川から、多量の土器とともに滑石製の有孔円盤や白玉が出土し、建物遺構は確認されなかったものの、古墳時代中期における集落祭祀について新たな資料を得ることができました。また、この自然河川埋没後には、多数の掘立柱建物が建てられた中世の屋敷地が検出されました。屋敷地の一角では木棺墓が検出され、県内では類例に乏しい和鏡や中国製磁器類の副葬品が出土しました。これら副葬品の内容等より、有力農民層の屋敷墓の可能性が考えられます。屋敷墓の近くからは、土坑の底に礫を敷き、その上に炭化物や焼土が堆積していた火化遺構と考えられる遺構や、隣接して火葬塚と考えられる方形周溝が検出され、溝のなかから凝灰岩製の層塔の笠部が出土しました。一つの遺跡から、このような中世の埋葬に関わる遺構が検出された遺跡は、県内では乏しく、中世墓制研究の貴重な資料となるものと考えられます。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、国土交通省四国地方整備局並びに関係各機関・地元関係各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月28日

香川県埋蔵文化財センター

所長 増田 宏

例　言

1 本報告書は、一般国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市中筋に所在する營水中筋遺跡（よみずなかすじいせき）の報告を収録している。

2 発掘調査は香川県埋蔵文化財センターが実施した。

3 発掘調査期間と担当者は次のとおりである。

期間 平成 20 年 9 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日

担当 文化財専門員 森下友子・山下平重・山元素子・藏本晋司

4 調査にあたっては次の方々、関係機関の協力を得た。また、石器・石製品の石材同定については、徳島大学総合科学部 村田明広・青矢睦月両氏のご教示を得た。記して謝意を表したい。

飯田茂雄・壱岐一哉・井出浩正・岡本治代・河野正訓・柴田圭子・白井克也・林泰治・松田朝由

東京国立博物館・徳島県立博物館・阿波市教育委員会・坂出市教育委員会・石井町教育委員会・国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所・地元自治会・地元水利組合（順不同、敬称略）

5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は藏本晋司が担当した。

6 本報告書で用いる座標系は世界測地系（国土座標第Ⅳ系）で、方位の北は国土座標第Ⅳ系による。また、標高は東京湾平均海面を基準とした。

7 遺構は次の略号により表示した。

SB 掘立柱建物 SA 柱穴列 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 ST 埋葬遺構 SD 溝
SR 旧河道 SF 焼成遺構 SX 性格不明遺構

8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線（単位m）である。

9 遺構断面図中の注記の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。

10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面を A 面、右側の面を B 面として記述する。剥片石器の場合は A 面が背面、B 面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。

12 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。

- 弥生土器：信里芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」
『第16回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前半～中期初頭の動態』、古代学
協会四国支部
- 信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」
『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』、香川県埋蔵文化財センター
- 信里芳紀 2011 「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構普通寺病院
統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』、香川県教育委員会・独立行
政法人国立病院機構普通寺病院
- 大久保徹也 1990 「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大
橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』、香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化
財調査センター・本州四国連絡橋公團
- 須恵器：田辺昭三 1981 「須恵器大成」、角川書店
大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 「年代のものさし －大阪府立近つ飛鳥博物館図録40－」
- 佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記
念 考古学論叢』、関西大学文学部考古学研究室
- 中・近世：尾上実 1983 「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』、藤澤一夫先生古稀記念論
集刊行会
- 佐藤竜馬 1995 「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第18
冊 国分寺楠井遺跡』、香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公團
- 佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文
化財発掘調査報告第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』、香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査セン
ター
- 佐藤竜馬 2003 「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
報告第4冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』、香川県教育委員会・財香川県埋蔵文化財調査センター
- 太宰府市教育委員会編 2000 「太宰府条坊跡XV -陶磁器分類編-」
- 乗岡実 2000 「中世の備前焼甕(壺)の編年案・紀年銘資料による大甕(壺)の変遷」『第2回中
近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会
- 乗岡実 2000 「備前焼擂鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究
会
- 乗岡実 2002 「近世備前焼擂鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』、岡山市教育委員会
- 藤澤良祐 2008 「中世瀬戸窯の研究」、高志書院
- 森田稔 1986 「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館研究紀要』第3号、神戸市
立博物館
- 山本悦世 2007 「鹿田遺跡における土師質土器碗の編年について」『鹿田遺跡5』、岡山大学埋蔵文
化財調査研究センター

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査と整理作業の経過	2

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3

第3章 調査の成果

第1節 調査の方法	9
第2節 基本層序	10
第3節 遺構・遺物	19

第4章 自然科学的分析の成果

第1節 誉水中筋遺跡出土鍛冶関連遺物の分析調査	144
第2節 誉水中筋遺跡の自然科学分析	166
第3節 香川県東かがわ市の譽水中筋遺跡から出土した銅鏡の鉛同位体比	183
第4節 樹種同定	189

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷	191
第2節 東四国地域における古代～中世墳墓の検討	195

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	遺跡位置図	5
第3図	道路周辺地形分類と道路分布図	6
第4図	誓水中筋道路と中世道路変遷	7
第5図	調査区割図	9
第6図	8区調査区東壁土層断面図	11
第7図	8区調査区南壁土層断面図	12
第8図	5区調査区西・南壁土層断面図	13
第9図	6区調査北・東・西・南壁土層断面図	14
第10図	9区調査区南壁土層断面図	15
第11図	9区調査区北壁土層断面図	16
第12図	10区調査区東・南壁土層断面図	17
第13図	1区調査区南壁・3区調査区西壁土層断面図	18
第14図	SR01平面・滑石製玉類出土位置図	20
第15図	SR01出土遺物実測図1	21
第16図	SR01出土遺物実測図2	22
第17図	SR01出土遺物実測図3	23
第18図	SR01出土遺物実測図4	24
第19図	掘立柱建物・柱穴配置図	25
第20図	SB01平・断面・出土遺物実測図	26
第21図	SB02平・断面・出土遺物実測図	27
第22図	SB03平・断面・出土遺物実測図	28
第23図	SB04平・断面・出土遺物実測図	29
第24図	SB05平・断面図	30
第25図	SB06平・断面・出土遺物実測図	31~32
第26図	SB07平・断面・出土遺物実測図	34
第27図	SB08平・断面・出土遺物実測図	35~36
第28図	SB09平・断面図	37
第29図	SB10平・断面・出土遺物実測図	38
第30図	SB11平・断面・出土遺物実測図	39
第31図	SB12平・断面・出土遺物実測図	41~42
第32図	SB13平・断面・出土遺物実測図	43
第33図	SB14平・断面図	44
第34図	SB15平・断面・出土遺物実測図	45
第35図	SB16平・断面・出土遺物実測図	46
第36図	SB17平・断面・出土遺物実測図	47
第37図	SB18平・断面・出土遺物実測図	48
第38図	SB19出土遺物実測図	48
第39図	SB19平・断面図	49
第40図	SB20平・断面・出土遺物実測図	50
第41図	SB21平・断面・出土遺物実測図	51
第42図	SA01平・断面図	52
第43図	SA02平・断面図	53
第44図	柱穴出土遺物実測図1	54
第45図	柱穴出土遺物実測図2	55
第46図	柱穴出土遺物実測図3	56
第47図	土坑・溝等遺構配置図	57
第48図	SK01平・断面図	58
第49図	SK02平・断面図	58
第50図	SK04平・断面・出土遺物実測図	59
第51図	SK06(左)・SK07(右)平・断面・ 出土遺物実測図	60
第52図	SK08(左)・SK10(右)平・断面・ 出土遺物実測図	61
第53図	SK11(左)・SK12(右)平・断面・ 出土遺物実測図	62
第54図	SK13(上)・SK15(下左)・SK16(下右) 出土遺物実測図	62
	平・断面・出土遺物実測図	63
第55図	SK20平・断面図	64
第56図	SK21平・断面図	64
第57図	SK22平・断面・出土遺物実測図	65
第58図	SK23平・断面・出土遺物実測図	66
第59図	SK24平・断面図	66
第60図	SK25(上左)・SK27(上右)・SK28(下左)・ SK29(下右)平・断面・出土遺物実測図	67
第61図	SK30(左)・SK31(右)平・断面図	68
第62図	SK33平・断面・出土遺物実測図	68
第63図	SK34・SD25平・断面・出土遺物実測図	69
第64図	SK35(上左)・SK36(上右)・SK38(下左)・ SK39(下右)平・断面・出土遺物実測図	70
第65図	SK40(左)・SK41(右)平・断面図	71
第66図	SK42(左)・SK43(右)平・断面図	72
第67図	SK44(上)・SK45(下左)・SK46(下右) 平・断面・出土遺物実測図	73
第68図	SK47(上左)・SK48(下)・SK49(上右) 平・断面・出土遺物実測図	74
第69図	SK50(左)・SK51(右)平・断面図	75
第70図	SK52(左)・SK53(右)平・断面・ 出土遺物実測図	76
第71図	SK54平・断面図	77
第72図	SK55平・断面・出土遺物実測図	77
第73図	SK56平・断面・出土遺物実測図	78
第74図	SK57(左)・SK58(中)・SK59(右) 平・断面・出土遺物実測図	79
第75図	SK60平・断面・出土遺物実測図	80
第76図	SK61平・断面・出土遺物実測図	81
第77図	SK62(左)・SK63(右)平・断面図	82
第78図	SK64平・断面・出土遺物実測図	83
第79図	SK65平・断面・出土遺物実測図	84
第80図	SK67平・断面図	85
第81図	SK67出土遺物実測図1	86
第82図	SK67出土遺物実測図2	87
第83図	SK67出土遺物実測図3	88
第84図	SK68(左)・SK69(右)平・断面・ 出土遺物実測図	89
第85図	SK70平・断面・出土遺物実測図	89
第86図	SK71平・断面・出土遺物実測図	90
第87図	SK72平・断面・出土遺物実測図	90
第88図	SK74(上左)・SK75(上右)・SK76(下左)・ SK77(下右)平・断面・出土遺物実測図	91
第89図	SK78(上左)・SK79(上右)・SK80(下左)・ SK81(下右)平・断面・出土遺物実測図	92
第90図	SK83(上左)・SK84(上右)・SK85(下) 平・断面・出土遺物実測図	93
第91図	SE01平・断面・出土遺物実測図1	94
第92図	SE01出土遺物実測図2	95
第93図	SF01平・断面・出土遺物実測図	96
第94図	SF02平・断面・出土遺物実測図	97
第95図	ST01平・断面図	98
第96図	ST01出土遺物実測図	99
第97図	SD01(左)・SD02・SD03・SD09(右) 平・断面・出土遺物実測図	100
第98図	SD08平・断面・出土遺物実測図	101
第99図	SD10平・断面・出土遺物実測図	101

第 100 図	SD11 平・断面・出土遺物実測図	102
第 101 図	SD12 平・断面・出土遺物実測図 1	103
第 102 図	SD12 出土遺物実測図 2	104
第 103 図	SD13 平・断面図	104
第 104 図	SD14 平・断面・出土遺物実測図	105
第 105 図	SD16 平・断面・出土遺物実測図	106
第 106 図	SD17 平・断面図	106
第 107 図	SD18 平・断面・出土遺物実測図	107
第 108 図	SD20 平・断面・出土遺物実測図	107
第 109 図	SD21 (左)・SD22 (中)・SD23 (右) 平・断面図	108
第 110 図	SD24 平・断面・出土遺物実測図	109
第 111 図	SD29 平・断面・出土遺物実測図	110
第 112 図	SD30 平・断面・出土遺物実測図	111
第 113 図	SD31 平・断面・出土遺物実測図 1	112
第 114 図	SD31 出土遺物実測図 2	113
第 115 図	SD32 平・断面・出土遺物実測図	114
第 116 図	SD33 (左)・SD34 (右) 平・断面・ 出土遺物実測図	115
第 117 図	SD36 平・断面図	115
第 118 図	SD36 出土遺物実測図	116
第 119 図	SD38 平・断面図	117
第 120 図	SD38 出土遺物実測図 1	119
第 121 図	SD38 出土遺物実測図 2	120
第 122 図	SD38 出土遺物実測図 3	121
第 123 図	SD39 ~ SD44 平・断面図	122
第 124 図	SD39 出土遺物実測図 1	123
第 125 図	SD39 出土遺物実測図 2	124
第 126 図	SD39 出土遺物実測図 3	125
第 127 図	SD41 出土遺物実測図	125
第 128 図	SD42 出土遺物実測図	126
第 129 図	SD44 出土遺物実測図 1	127
第 130 図	SD44 出土遺物実測図 2	128
第 131 図	SD45 平・断面・出土遺物実測図	129
第 132 図	SD47・SD48・SD49 平・断面・ 出土遺物実測図	130
第 133 図	SD50 平・断面・出土遺物実測図	131
第 134 図	SD51 平・断面・出土遺物実測図	131
第 135 図	SD52 平・断面・出土遺物実測図	132
第 136 図	SD53 (左)・SD54 (右) 平・断面・ 出土遺物実測図	133
第 137 図	SD57 平・断面・出土遺物実測図	134
第 138 図	SD68 平・断面・出土遺物実測図	134
第 139 図	SX01 平・断面図	135
第 140 図	SX01 出土遺物実測図	136
第 141 図	SX02 平・断面図	136
第 142 図	SX03 平・断面・出土遺物実測図	137
第 143 図	SX04 平・断面・出土遺物実測図	138
第 144 図	SD19 平・断面図	138
第 145 図	SD27 平・断面・出土遺物実測図	139
第 146 図	遺構不明の遺物実測図	141
第 147 図	包含層等出土遺物実測図 1	142
第 148 図	包含層等出土遺物実測図 2	143
第 149 図	放射性炭素年代測定結果	167
第 150 図	珪藻化花群集	169
第 151 図	花粉化花群集	175
第 152 図	螢光 X 線分析結果	178
第 153 図	銅鏡の蛍光 X 線スペクトル	184
第 154 図	鉛同位体比を用いた産地推定の概念図 (A 式図)	185
第 155 図	鉛同位体比を用いた産地推定の概念図 (B 式図)	186
第 156 図	譽水中筋道跡から出土した銅鏡が示す 鉛同位体比 (A 式図)	186
第 157 図	譽水中筋道跡から出土した銅鏡が示す 鉛同位体比 (B 式図)	186
第 158 図	譽水中筋道跡から出土した銅鏡と 鎌倉時代資料が示す鉛同位体比 (A 式図)	186
第 159 図	譽水中筋道跡から出土した銅鏡と 鎌倉時代資料が示す鉛同位体比 (B 式図)	186
第 160 図	第 158 図の拡大図 (A 式図)	187
第 161 図	第 159 図の拡大図 (B 式図)	187
第 162 図	遺構の変遷 (1)	192
第 163 図	遺構の変遷 (2)	193
第 164 図	古代・中世墓の分布	196
第 165 図	古代火葬墓骨蔵器実測図	203
第 166 図	旧阿野郡の火葬墓骨蔵器実測図	205
第 167 図	石組築の変遷	208
第 168 図	中世火葬墓骨蔵器実測図	212
第 169 図	中世火葬墓骨蔵器の変遷図	213

表 目 次

第 1 表	供試材の概要と調査項目	154
第 2 表	供試材の化学組成	154
第 3 表	放射性炭素年代測定結果	167
第 4 表	珪藻分析結果 (1)	170
第 5 表	珪藻分析結果 (2)	171
第 6 表	花粉分析結果	174
第 7 表	樹種同定結果	176
第 8 表	螢光 X 線分析結果	179
第 9 表	銅鏡の鉛同位体比値	185
第 10 表	古代火葬墓	197
第 11 表	古代土葬墓	197
第 12 表	中世土葬墓	198
第 13 表	中世土葬墓	199
第 14 表	中世土葬墓	200
第 15 表	中世火葬墓	200
第 16 表	中世火葬墓一覧 2	201
第 17 表	中世火葬墓関連遺構一覧 1	201
第 18 表	中世火葬墓関連遺構一覧 2	202
第 19 表	火葬塚一覧	202
第 20 表	和鏡出土遺跡一覧	210
第 21 表	掘立柱建物属性表 (1)	218
第 22 表	掘立柱建物属性表 (2)	219
第 23 表	掘立柱建物属性表 (3)	220
第 24 表	掘立柱建物属性表 (4)	221
第 25 表	土器觀察表 (1)	222
第 26 表	土器觀察表 (2)	223
第 27 表	土器觀察表 (3)	224
第 28 表	土器觀察表 (4)	225
第 29 表	土器觀察表 (5)	226
第 30 表	土器觀察表 (6)	227

第31表	土器観察表(7).....	228
第32表	土器観察表(8).....	229
第33表	土器観察表(9).....	230
第34表	土器観察表(10).....	231
第35表	土器観察表(11).....	232
第36表	土器観察表(12).....	233
第37表	土器観察表(13).....	234
第38表	土器観察表(14).....	235
第39表	土器観察表(15).....	236
第40表	土器観察表(16).....	237
第41表	土器観察表(17).....	238
第42表	土器観察表(18).....	239
第43表	土器観察表(19).....	240
第44表	土器観察表(20).....	241
第45表	土器観察表(21).....	242
第46表	土器観察表(22).....	243
第47表	土器観察表(23).....	244
第48表	土器観察表(24).....	245
第49表	土器観察表(25).....	246
第50表	土器観察表(26).....	247
第51表	土器観察表(27).....	248
第52表	土器観察表(28).....	249
第53表	土器観察表(29).....	250
第54表	土製品観察表.....	251
第55表	土鍾観察表.....	251
第56表	軒平瓦観察表.....	251
第57表	平・丸瓦観察表.....	251
第58表	壁土観察表.....	251
第59表	石器・石製品観察表(1).....	251
第60表	石器・石製品観察表(2).....	252
第61表	玉類観察表.....	252
第62表	木製品観察表.....	253
第63表	金属器観察表.....	253
第64表	和錦観察表.....	254

写真目次

写真1	入野山若王子神社遠景(北より).....	8
写真2	寺田寺法印塔.....	8
写真3	銅鏡の写真.....	183
写真4	銅鏡のX線写真.....	183
写真5	紫光X線測定点.....	183
図版1	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	155
図版2	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	156
図版3	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	157
図版4	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	158
図版5	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	159
図版6	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	160
図版7	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	161
図版8	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	162
図版9	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	163
図版10	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	164
図版11	楕形鐵治津の顯微鏡写真・EPMA調査結果.....	165
図版12	珪藻化石の顯微鏡写真.....	180
図版13	花粉化石の顯微鏡写真.....	181
図版14	炭化木材の顯微鏡写真.....	182
図版15	樹種同定試料の光学顯微鏡写真.....	190
図版16	遺構写真.....	257
	5区全景(東より)	
	5区SD10・SD11・SD12(南より)	
	5区遺構検出状況(南より)	
図版17	遺構写真.....	258
	7区全景(西より)	
	7区SK08(東より)	
	7区SK07炭化物出土状況(東より)	
図版18	遺構写真.....	259
	7区SX01土層断面(西より)	
	6区全景(西より)	
	6区全景(南より)	
図版19	遺構写真.....	260
	6区全景(南より)	
	6区SK12遺物出土状況(北より)	
	6区SK13遺物出土状況(北より)	
図版20	遺構写真.....	261
	6区SK15遺物出土状況(東より)	
	6区SP068遺物出土状況(北東より)	
6区SP090遺物出土状況(西より)		262
図版21	遺構写真.....	263
	9区全景(東より)	
	9区SP187遺物出土状況(南西より)	
	9区SD12罹出土状況(南より)	
図版22	遺構写真.....	264
	10区全景(東より)	
	10区全景(南より)	
	10区SP297遺物出土状況(北より)	
図版23	遺構写真.....	264
	10区SP256遺物出土状況(南より)	
	10区SK46全景(南より)	
	10区SR01臼玉出土状況(南より)	
図版24	遺構写真.....	265
	8区1面全景(東より)	
	11区1面全景(東より)	
	8区調查区南壁土層断面(北西より)	
図版25	遺構写真.....	266
	11区SP340遺物出土状況(南より)	
	8区SP537炭化物・焼土出土状況(南より)	
	8区SP643遺物出土状況(西より)	
	8区SP588遺物出土状況(南より)	
	11区SP518遺物出土状況(東より)	
	11区SK60全景(東より)	
	11区SK60土層断面(南より)	
図版26	遺構写真.....	267
	8区SK68全景(南より)	
	8区SK68土層断面(南より)	
	8区SK64遺物出土状況(南より)	
	8区SK64土層断面(北より)	
	11区SK57全景(南より)	
	11区SK58全景(南より)	
	11区SK59遺物出土状況(東より)	
	11区SK56全景(南より)	
図版27	遺構写真.....	268
	8区SF01全景(東より)	
	同土層断面(南東より)	
	同土層断面細部(北より)	
	同細部(西より)	

同様出状況（東より）	269	2区 SD68 遺物出土状況（西より）	280
図版 28 遺構写真		跡遠景（南より）	
8区 SF02 全景（東より）		東かがわ市立登水小学校児童の体験学習風景	
同様出状況（西より）		現地説明会風景	
同土層断面（北東より）		図版 40 遺物写真	281
同細部（北より）		2区 ST01 出土遺物	
同土層断面細部（西より）		図版 41 遺物写真	282
図版 29 遺構写真	270	輸入陶磁器	
8区 SK67 全景（東より）		滑石製有孔円盤・白玉	
同様出状況（北より）		図版 42 遺物写真	283
8区 SK65 遺物出土状況（北より）		1・2・4・6・7・51・64・67・77・ 78・79・80・83・85・102・104・180・ 182・183・184・185	
8区 SD32 土層断面（北より）		図版 43 遺物写真	284
8区 SD31 遺物出土状況（東より）		193・194・196・215・238・271・280・ 315・345・348・354・355・390・394・ 401・402	
図版 30 遺構写真	271	図版 44 遺物写真	285
3区 全景（西より）		412・421・437・439・443・457・459・ 471・472・504・508・509・511・512・ 529・556・557・578・646・673・677	
3区 全景（南より）		図版 45 遺物写真	286
3区 遺構出土状況（南より）		527・528・555・579・580・605・651・ 676・718・739・804・811・837・840・ 843・1102・1117	
図版 31 遺構写真	272	図版 46 遺物写真	287
3区 SK71 全景（南より）		697・698・724・729・874・894・948・ 977・978・999・1039・1041・1104・1121・ 1159・1202・1214・1253	
3区 SK71 土層断面（南より）		図版 47 遺物写真	288
3区 SK71 完掘状況（南より）		160・531・567・690・707・744・759・ 865・867・869・1000・1002・1003・1044・ 1043・1118・1120・1132・1143・1190・ 1191・1192・1193・1194・1200・1205・ 1210・1216・1224・1225・1226・1243・ 1251・1262	
3区 SK71 挖り方断面（南より）		図版 48 遺物写真	289
3区 SK71 石敷上面炭化物検出状況（南より）		627	
3区 SK69 完掘状況（南より）		図版 49 遺物写真	290
3区 SK69 検出状況（南より）		121・179・292・293・294・295・296・ 393・647・691・760・890・1008・1009・ 1049	
図版 32 遺構写真	273	図版 50 遺物写真	291
3区 SD36 全景（西より）		173・174・175・176・177・197・198・ 199・211・289・290・356・387・410・ 411・462・538・539・540・541・542・ 543・608・628・629・630・631・719・ 1164	
3区 SD36 全景（東より）		図版 51 遺物写真	292
3区 SD36 遺物出土状況（東より）		357・358・372・632	
図版 33 遺構写真	274	図版 52 遺物写真	293
3区 SD39～SD44 全景（西より）		118・119・172・287・876・877・1046・ 1047・1122・1123・1223・1230	
3区 SD39・SD42・SD44 土層断面（西より）		図版 53 遺物写真	294
3区 SD39・SD41・SD44 土層断面（西より）		120・225・231・284・683・879・1005・ 1163・1231	
3区 SD39 遺物出土状況（南より）		図版 54 遺物写真	295
3区 SD42 肩部遺物出土状況（東より）		285・546・748・880・1006・1007・1125	
図版 34 遺構写真	275		
1区 全景（西より）			
1区 SD49 遺物出土状況（南より）			
1区 SR01 土層断面（南より）			
図版 35 遺構写真	276		
4区 全景（東より）			
4区 SP781 遺物出土状況（南より）			
4区 SK81 土層断面（西より）			
図版 36 遺構写真	277		
2区 全景（北より）			
2区 全景（南より）			
2区 SX03 全景（北より）			
図版 37 遺構写真	278		
2区 ST01 全景（北より）			
2区 ST01 検出状況（北より）			
2区 ST01 土層断面（東より）			
2区 ST01 副葬品出土状況（西より）			
図版 38 遺構写真	279		
2区 ST01 副葬品出土状況（南より）			
2区 ST01 副葬品出土状況（西より）			
2区 ST01 和鏡出土状況（南より）			
2区 ST01 和鏡下板材出土状況（南より）			
2区 SE01 完掘状況（南より）			
2区 SE01 遺物出土状況（北より）			
2区 SE01 土層断面（東より）			

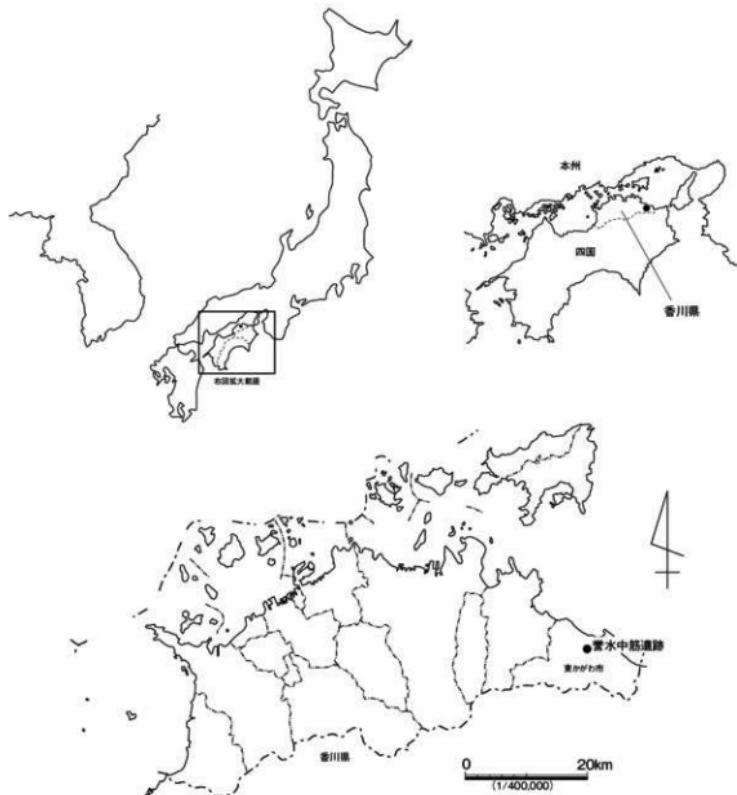
付図目次

付図1 航水中筋遺跡平面図

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

一般国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い、香川県教育委員会では平成19・20年度に中筋地区において試掘調査を実施した。その結果、調査対象地のうち西半部のトレンチで、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されたことから、誉水中筋遺跡として文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断した。



第1図 遺跡位置図

第2節 発掘調査と整理作業の経過

香川県埋蔵文化財センターでは、用地買収の終了した調査対象地 4,459m²について平成 20 年 9 月 1 日から発掘調査を開始した。当初 1 班体制であったが、平成 21 年 2 月 1 日より 1 班を増員して 2 班体制とし、同年 3 月 31 日まで調査を実施した。調査は直営方式である。

なお、平成 20 年 12 月 6 日には現地説明会を実施し、市内外から多数の参加者があり、考古学的な関心の高さが伺われた。

整理作業は、平成 27 年 7 月 1 日から同年 10 月 30 日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理等を行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28%入りコンテナ 70 箱である。遺構については、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構について報告した。また、遺物については、遺構出土遺物のなかでも遺構の時期を直接反映するものを最優先とし、混入遺物や遺構外出土遺物についてはとくに必要と認めるもののみ掲載した。

発掘調査及び整理作業の体制は下表のとおりである。

平成 20 年度発掘調査体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
総括 課長 春山 浩康 課長補佐（総括） 武井 寿紀	総括 所長 大山 漢光 次長 岸瀬 常雄
総務・生涯学習推進グループ 副主幹 香西 としみ 主任 林 照代	総務課 総務課長 岸瀬 常雄（兼務） 主任 宮田 久美子 主任 鳩田 和司 主任 古市 和子 主任 広瀬 健一 調査課 調査課長 岸瀬 常雄（兼務） 文化財専門員 山下 平重 文化財専門員 森 下友子 文化財専門員 山元 実子 文化財専門員 藤本 香司 嘱託（土木） 砂川 哲夫 嘱託（調査技術員） 東原 雄明 嘱託（調査技術員） 今井 千佳子
文化財グループ 主幹（兼）課長補佐 鹿野 実郎 主任文化財専門員 森 格也 文化財専門員 乗松 真也	

平成 27 年度整理体制一覧表

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課	香川県埋蔵文化財センター
総括 課長 増田 宏 副課長 小柳 和代	総括 所長 真鍋 昌宏 次長 前田 和也
総務・生涯学習推進グループ 副主幹 松下 由美子 主任 和木 麻佳	総務課 課長 前田 和也（兼務） 主任 寺岡 仁美 主任 高木 秀哉 主任 中川 美江 主任 九尾 麻知子 主任 岩崎 昌平 主任 森 格也 主任文化財専門員 藤本 香司 嘱託 市川 孝子 嘱託 藤本原 美恵子 嘱託 甲斐 美智子 嘱託 葛西 黒 嘱託 香西 荘理 嘱託 高橋 千恵 嘱託 森 后代 嘱託 山地 理子
文化財グループ 課長補佐 片桐 孝浩 主任文化財専門員 山下 平重 文化財専門員 乗松 真也	資料普及課 課長

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

遺跡は、東かがわ市中筋328番地ほかに所在する。調査前の地目は、田・畑・宅地として利用されていた。

遺跡が所在する東かがわ市大内・白鳥地域は、北は瀬戸内海に面し、東～南～西は与治山や虎丸山、北山等の標高約200～400mの山塊に囲繞された、面積約9.7km²の閉鎖的な臨海性の小平野を中心とする。平野部東半は中川と湊川が、西半は与田川と番屋川がそれぞれ北流し、流域に扇状地性の谷底平野や氾濫平野を形成する。河口域には、現海岸線に平行して数列の砂州・砂堆が形成され、その背後には海岸平野・三角州が広がる。現在三角州は、その多くが盛土され、大内・白鳥の市街地へと変貌している。

平野部に接する山塊は、後期白亜紀の珪長質深成岩類（領家帯）によって形成され、その奥部の讃岐山脈には、後期白亜紀の海成礫岩や泥岩、砂岩等が分布する和泉層群が東西走する。与田・番屋川は領家帯に水源があり、流域は花崗岩質の堆積層を形成し、湊川の水源は和泉層群に達し、河床には砂岩等の堆積岩が花崗岩類に混じって多く認められる。弥生時代以降の流域の遺跡からは、和泉層群産とみられる砂岩製の砥石等の石器が多く出土しており、河床の転石を利用したものと思われる。

本地域は、上述したように自然地形により画された閉鎖的な空間を形成するが、東は中川上流の帰来山と翼山の間の小峠を介して引田地域と、南は湊川上流の鶴の田尾峠（標高約370m）を介して徳島県吉野川下流域と、西は番屋川上流の北山南麓の小峠を介して津田湾沿岸地域や、田面峠（標高約50m）を介して長尾盆地と、陸路によりそれぞれ連絡することが可能で、さらに各河川を利用した内陸部との舟運や、湊川あるいは与田川河口部に想定される『兵庫北関入船納帳』（林屋編1981）に記された「三本松」など臨海部の港津を介して、海上交通により遠隔地ともアクセス可能な、交通の結節点としての恵まれた条件が付与された地域と評価できる。

第2節 歴史的環境

縄文から古墳時代の動向

上述した陸路や海路の利用は、原間遺跡の自然河川から、結晶片岩粒の混入した阿波吉野川流域産の縄文時代中期と晚期前半の土器が出土（香川県教育委員会2005）し、田中遺跡からは結晶片岩製の石棒が出土しており、遙くとも縄文時代に遡る可能性があることが考古資料から実証される。

さて、本地域の遺跡は、第3図に示したように、現状では谷底平野や氾濫平野、扇状地上に集落関係の遺跡が、丘陵上に古墳や墳墓等の遺跡がそれぞれ分布する。推定南海道も、海岸平野や三角州が内陸部にまで入り込む番屋川流域の松崎地区周辺を除けば、概ね氾濫平野を中心にして、本地域を横断すると考えられている（金田1988）。今後の詳細な分布調査や試掘調査を待つ必要があろうが、海岸平野や三角州地域の面的な開発は、中世後半期以降に遡れる可能性が高いと考えられる。

一方、氾濫平野の本格的な開発行為は、おそらく弥生時代に遡る。本地域での遺跡分布は、弥生時代中期中葉を除けば、後期中葉までは散漫であることが指摘されている。後期後半から終末期にかけて、鍛冶関連遺物を伴う堅穴建物等が検出された原間遺跡をはじめ、地域内で遺構や遺物が出土した遺跡数

は、中期後葉と比較して倍増する（信里 2004）。飛躍的に地域内の開発が進展したことは間違いない。

そうした動向と併行して、大型建物への金属器や玉類等の非自給物資の集中や、水銀朱を使用した葬送儀礼が行われた桶端埴丘墓の築造等、地域内での階層差が顕在化する。中期中葉の池の奥遺跡における磨製石斧類の集中保有は、集落間での分業体制の成立とともに、上記した階層化社会を準備したとも考えられる。

仲戸遺跡、仲戸東遺跡で実施した花粉分析の成果（香川県教育委員会 2016）からは、縄文時代晚期から弥生時代終末期の間においてアカマツ林の相対的拡大が示され、その傾向は古代へと継続することが示された。これは遺跡周辺の丘陵部に自生していた照葉樹林等が林産資源の利用拡大により伐採され、二次林であるアカマツ林へと転換したこと、つまりは周辺の植生に大きなダメージを与えるような大規模かつ恒常的な開発行為がなされたことが想定され、上記した考古学的な状況を補完する。

こうした諸開発行為の延長上に、全長約 38 m の前方後円墳である大日山古墳を位置付けることができる。中期には韓半島との関係が想定される原間 6 号墳、後期には多彩な形象埴輪が出土した仲戸東遺跡等、時期により多様な様相を示しながら古墳が築造され、そこには吉備や畿内といった他地域との関係も垣間見ることができる。

古代の大内郡

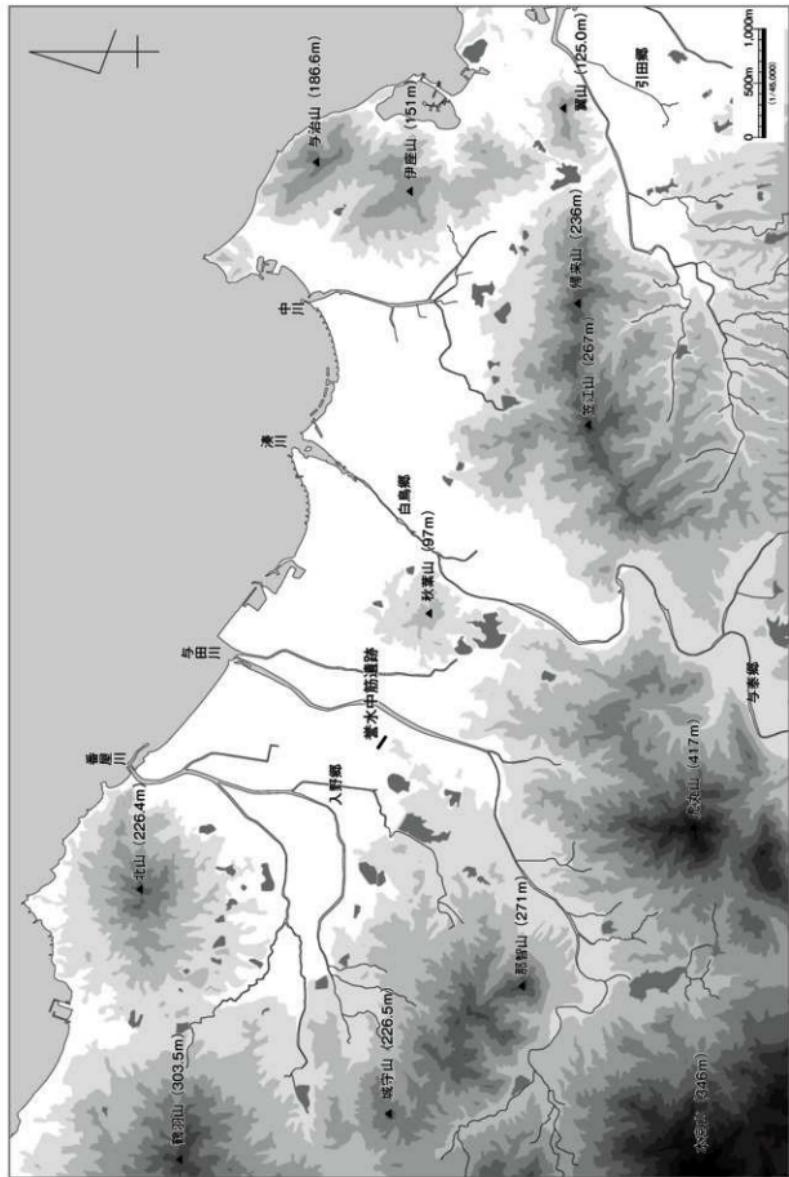
律令期には、大内郡が置かれ、管内には引田・白鳥・入野・与泰の四郷があった。遺跡周辺は白鳥郷に含まれる。大内郡はもと小郡であったが、『統日本後紀』承和十年（843）5月8日条に「又讃岐国大内郡小郡。只有領帳。領則領調入京。帳籍留國釐務。非常移病。无一人從公。加郷戸田数。既基下郡。改爲下。加領一員焉。」（黒板 1971）とあり、郷戸田数の増加などを理由に下郡に改め、領一員を加えている。

なお、天平十九年（747）2月11日の法隆寺伽藍縁起　流記資財帳（正倉院文書）の寺領莊園について記した部分に、「大内郡一処」とあり、郡内に法隆寺領の莊園があったとされるが、具体的な場所やその後の変遷については明らかではない。

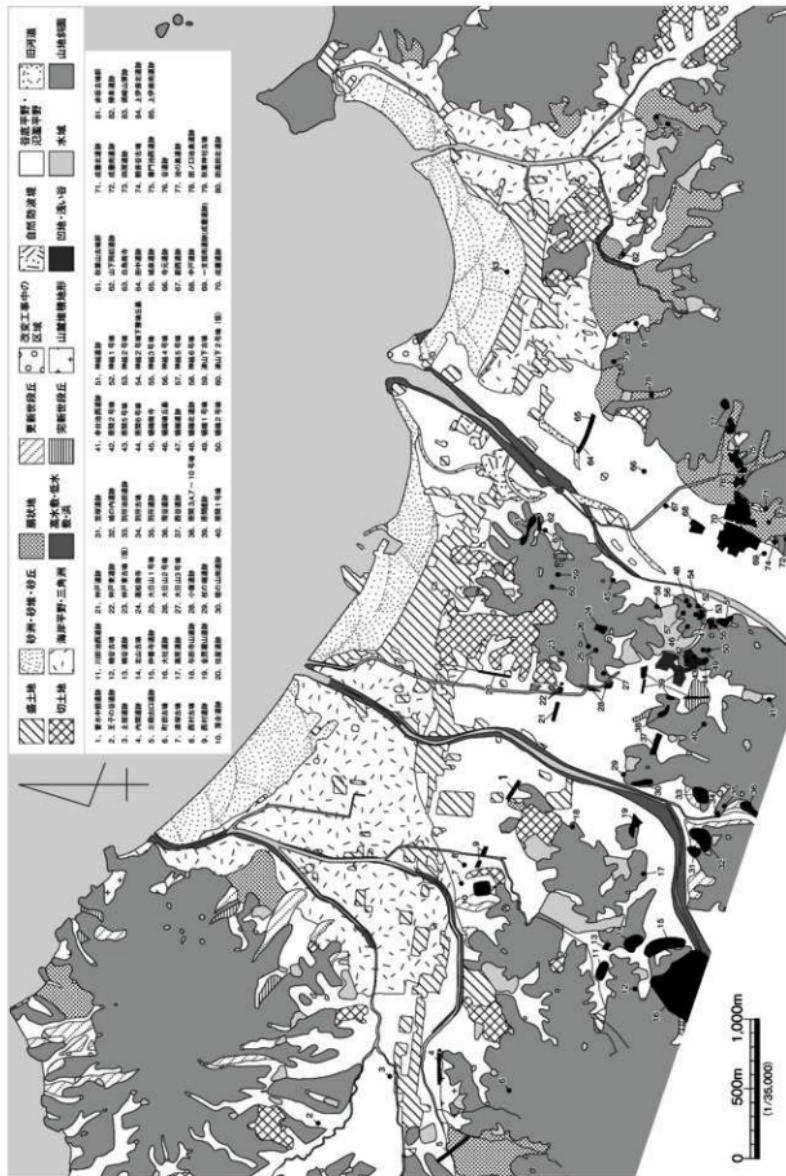
白鳥に所在する白鳥廃寺は白鳳期創建の可能性が説かれ、過去の調査により塔や金堂とみられる基壇や心礎石が、近年の調査では僧坊とみられる掘立柱建物がそれぞれ検出され、一町四方の寺域に南滋賀廃寺式の伽藍配置が想定されている。また秋葉山南麓には、平安時代に高松廃寺が創建されている。小規模な寺院であったようだが、付属する瓦窯 2 基が調査されている。古代においては、秋葉山周辺が本地域の宗教センターとして機能していたと考えられる。

一方式内社は、水主の水主神社があり、承和三年（836）に從五位下に除された（統日本後紀）のを史料上の初見として、天慶三年（940）には藤原純友の乱平定祈願の功により正五位下を受けられている（長寛勘文）。また、平安末期に書写されたとされる大般若経を収める経函が至徳三年（1385）に作られ、その裏書に天承元年（1131）や長承二年（1133）等の国司や目代の神押とともに、社領の寄進がなされたことが記される。郡内唯一の式内社であり、讃岐国内でも有力社として評価されている（野中 1982）。

これら宗教施設は、自然地形により集落が展開する平野部とはやや隔離された場所に造営され、例えば白鳥廃寺が古代南海道の湊川渡河点至近地に位置しているように、水陸交通路の結節点に位置し、人・モノ・情報のネットワークにアクセス可能な場所が巧みに選地されているように思われる。当時の宗教



第2図 位置図（国土地理院の電子地図（数値地図2500）を55.5%に縮小して作成）



第3図 連絡同辺地形分類と道路分布図(国土地理院の電子地図(数値地図2500(土地条件))を71.4%に縮小し、道路位置を追記して撮影)

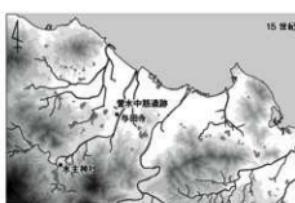
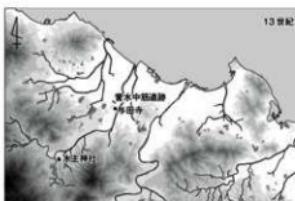
施設が有する機能の一端を示すものであろう。

中世の誉水巾筋遺跡

鎌倉時代には大内郡は一円所領化され、皇室の御願寺領として京都淨金剛院領大内莊が成立し、天皇家に伝領された。与田郷の地頭に小早川氏がみえ、小早川本仏讓状案（小早川家文書）によれば、小早川氏が有した所職は地頭職以外に、公文・案主・田所等の諸職に及ぶ。嘉応二年（1170）に讃岐国は建春門院の院分国となり、国司としてその弟平親宗が任じられると、讃岐国は平家とのつながりを深める。想像を逞しくすれば、その際國衙領であった大内郡は、平家の所領に編入され、鎌倉時代に平家没官領として、皇室所領大内莊が成立した可能性も考えられる。

本地域の中世の遺構・遺物は、本遺跡以外には、王子の谷、三殿出口、内間、西村、仲戸、原間、成重、田中、城泉の各遺跡で確認されている。遺跡により時期差を認めるものの、平野部の開発が広域的になされていたことを物語る。

さて、誉水中筋遺跡は、標高約 271 m の那智山より北東に樹枝状に延びる丘陵の一尾根先端据部に位置する。背後の丘陵の東裾、遺跡より直線距離にして約 400 m 南には、四国八十八箇所奥院として参詣者で賑わう、与田寺が所在する。与田寺は、医王山虛空藏院と号し、真言宗善通寺派に属し、本尊は薬師如来である。寺の与田寺旧記には、天平11年（739）行基により創建され、当初の寺域は八町四方あり、医王山薬師寺と号し法相宗であったが、空海により真言宗に改められ、鎮護国家の勅願所としたという。寺の創建については、同時代の史料を欠くため実証は困難であり、発掘調査など考古学的な研究に依らなければならないだろう。史料上の初見は、東かがわ市与田山にある若王寺所蔵の応永六年（1399）から同九年（1402）に書写された若一王子大般若經の奥書に「虛空藏院住持金資 生年三十七」という増附の署名があり、遙くとも 15 世紀初頭には寺院として成立していたことは間違いない。本尊の薬師如来は 12 世紀の作とされ、13 世紀の絹本着色仏涅槃図や、同時期の絹本着色稚児大師像、李朝初期（15 世紀初頭）の可能性のある絹本着色地蔵曼荼羅図、応永十四年（1407）に増附が願主となり聖宥が彫版した十二天像版木などが伝わる。また、寺の背後の山裾に 2 基の宝篋印塔があり（写真2）、鎌倉末期から南北朝期のものとされる。



第4図 誉水中筋遺跡と中世遺跡変遷

香水中筋遺跡（香川県教育委員会 2017 年）

これら宝物の伝来については明らかではないが、12 ~ 13 世紀頃には何らかの堂宇が創建されていた可能性が考えられよう。

後述するように本遺跡での屋敷地の成立時期とも合致しており、地理的に近接することからも、本遺跡が与田寺との関係のなかで成立した可能性も考えられる。

引用・参考文献

- 香川県教育委員会 2005 「国道大内白鳥インター線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 京間遺跡」
香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局 2016 「国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 巻 伸戸遺跡・伸戸東遺跡」
金田章裕 1988 「讃岐の朱里遺跡」『香川県史』第一巻史編、香川県
黒板勝美編著 1971 『新訂増補国史大系〔普及版〕 続日本後紀』吉川弘文館
高松市歴史資料館 1996 「讃岐の古瓦展」
豊島修 1974 「讃岐地方における熊野信仰について－水主石風呂との関係において－」『香川史学』第 3 号、香川歴史学会
野中寛文 1982 「大水主社領の範囲と構造」『香川の歴史』2 号、香川県県史編さん室
信里芳紀 2004 「東讃地域の弥生集落の動態」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 47 巻 成重遺跡 1』、香川県教育委員会・
明香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公团
萩原恵司 2004 「讃岐國水主神社所蔵『外傳大般若經』と『北野社一切經』について」『佛教大学総合研究所紀要』別巻 2、佛教大学総合研究所
林屋辰三郎編 1981 『兵庫北関入船納帳』、中央公論美術出版



写真 1 入野山若王子神社遠景（北より）



写真 2 与田寺宝篋印塔

第3章 調査の成果

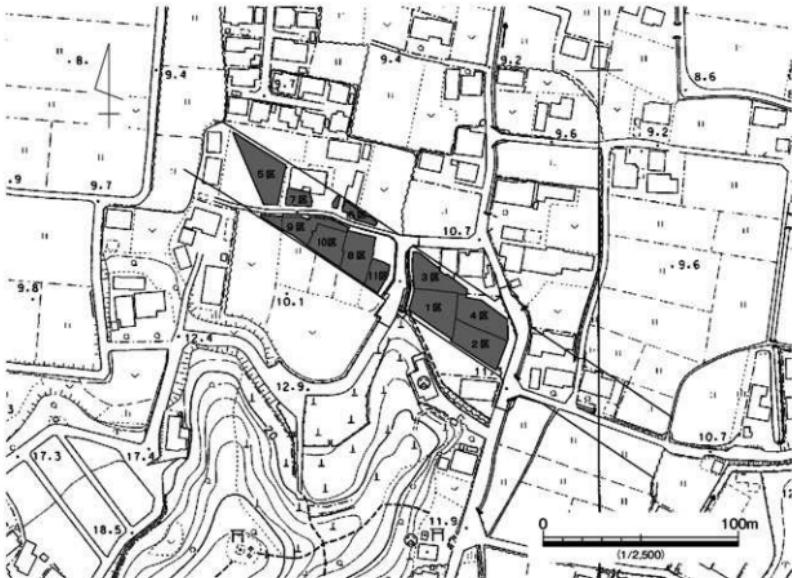
第1節 調査の方法

調査対象地は、南北幅約32m、東西延長約172mと東西に細長く、調査前は耕作地や宅地として利用されていた。したがって、調査地内を用水路や市・農道が縦横に走行し、こうした工作物によって、調査区は大きく5ブロックに区分された。さらに、調査時の工程等により調査段階でさらに小区画に分割し、第5図に示したように11区に区分して調査を実施した。

調査は、直営方式により実施し、8・11区は第2遺構面、それ以外の調査区は第3遺構面まで重機により掘削し、それ以下は人力にて掘り下げを行った。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。調査に際してグリッドは設定せず、調査小区が狹小なため、包含層等の遺物については、必要に応じてトータルステーションで出土位置を測量・記録し、出土状況を写真撮影して取り上げた。

遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、すべて新たな番号を付して統一した。遺構の種別については、調査時の担当者の所見を尊重し、土坑としたものが掘立柱建物の柱穴となったもの等、明らかに齟齬があるものを除いて、基本的に変更は行っていない。なお、調査区名は調査時のものをそのまま踏襲する。

調査は1~8・10区を山下・森下が、9・11区を山元・藏本がそれぞれ担当した。本書の執筆に際しては、各担当者間で協議し、事実関係に齟齬がないように調整を行った上で、藏本が執筆した。



第5図 調査区割図 (東かがわ市都市計画図 10 を一部改変して掲載)

第2節 基本層序

土層序の観察は、2・4区を除く各調査区の壁面において行った。調査地は耕地や宅地として利用されており、近代以降の搅乱や削奪による影響を除けば、概ね各調査区の堆積状況に大差はないようである。したがって以下では、8区での堆積状況を基本層序として記述し、他の調査区については、記録化された土層図を提示するにとどめたい。

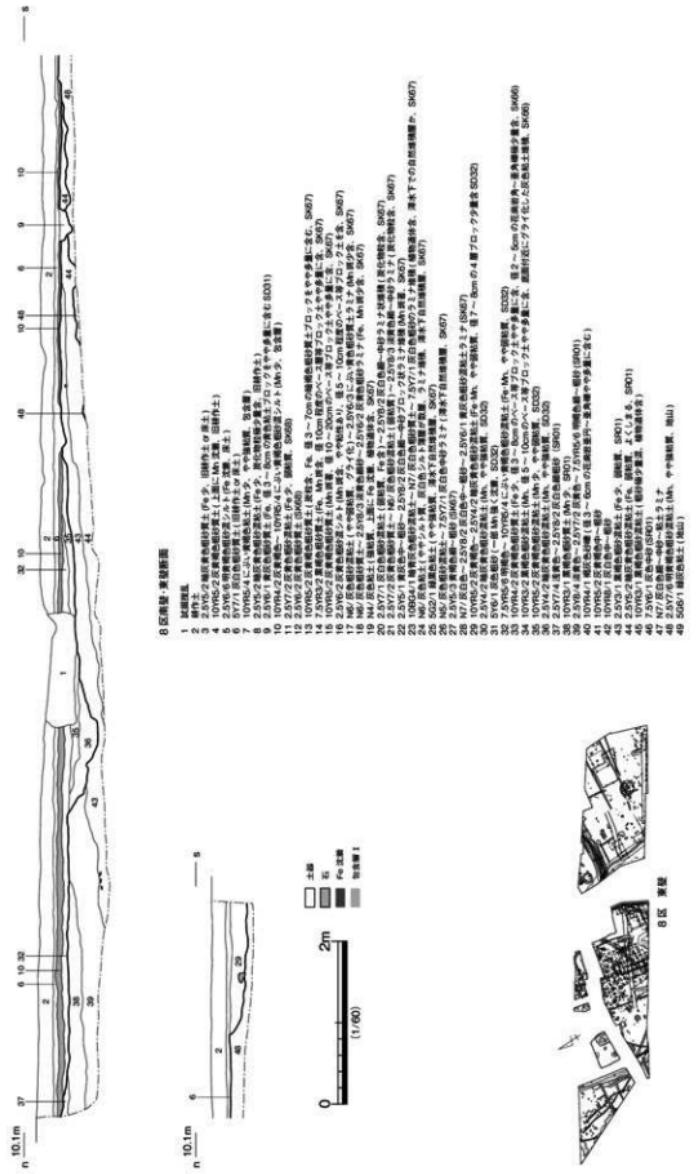
8区は、11区とともに2筆の耕地に造成されており、現耕作土下で1～3層（第6・7図2～4層）に細分された床土ないし旧耕作土の水平堆積層を確認した。これら旧耕作土層からは、近代以前の遺物が出土しており、同期を下限とする、おそらくは近世後半～近代の耕作土層と考えられる。これら耕作土層は、8区以外にも各調査区に分布し、当該期には遺跡周辺が耕地として広く利用されていたことが考えられる。

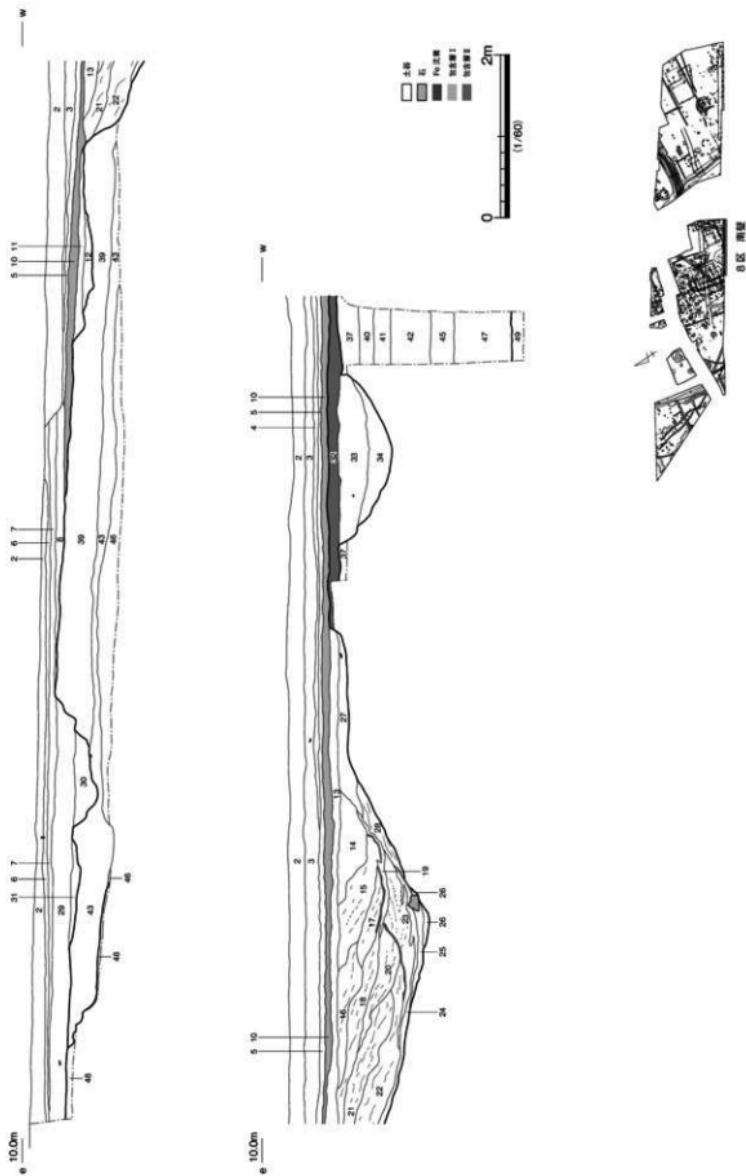
これら旧耕作土層下には、北西方向へ緩やかに傾斜する黄褐色シルト（同図10層）の堆積を確認し、層中より中世後半を下限とする遺物が出土したことから、包含層（包含層I）と判断した。後に本層上面より溝SD27が掘り込まれていることを確認したが、本溝については本層下面で残存部を調査したにとどまる。面的な調査は行えていないが、本層上面を第1遺構面として報告する。溝SD27以外に確認された遺構はなく、時期を特定できないが、包含層Iを上限とし、おそらくは近世の耕作土層のベース面の可能性を考える。

包含層I下面では多数の柱穴や溝等の遺構が確認され、本遺構面を第2遺構面として調査を実施した。本遺跡で確認された遺構の大半は、中世前半を中心とする本遺構面に帰属する。なお、丘陵裾部に近い8区南東端部付近では、包含層堆積は上位の旧耕作土層の造成により削奪されたとみられ、同層下で遺構を検出した。8区以外にも同様に、削奪により同層の堆積が認められない調査区が存在する。なお、旧耕作土層下で検出した遺構については、遺構埋土や出土遺物より、そのほぼすべてが、第1遺構面ではなく本遺構面に帰属するものと判断した。

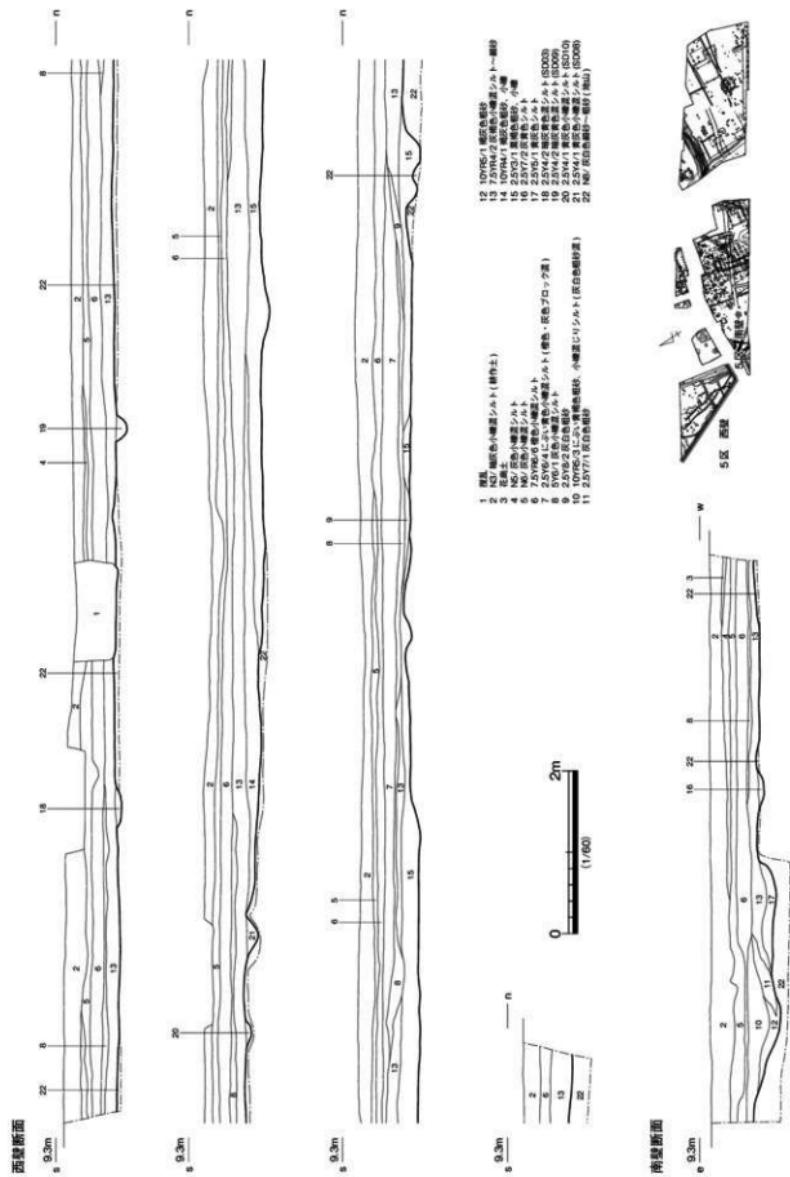
8区北西部を中心に、包含層I下面で明褐色粗砂混粘土（同図32層・包含層II）の水平堆積を確認し、少量の遺物が出土した。本層下面で溝SD29・32を検出し、本遺構面を第3遺構面aとして調査を実施した。出土遺物より本遺構面は、古代末～中世初頭と考えられる。溝2条以外に検出された遺構はなく、遺物量も乏しい。8・11区以外にも本層とみられる堆積層は存在したようだが、それら調査区では、本遺構面まで掘り下げて遺構を検出したため、第2遺構面と本遺構面の遺構とが同一面で混在し、明確に区別することができない。出土遺物より、大半の遺構は第2遺構面に帰属するものと考えたが、遺物の乏しい遺構については、断定できなかった。

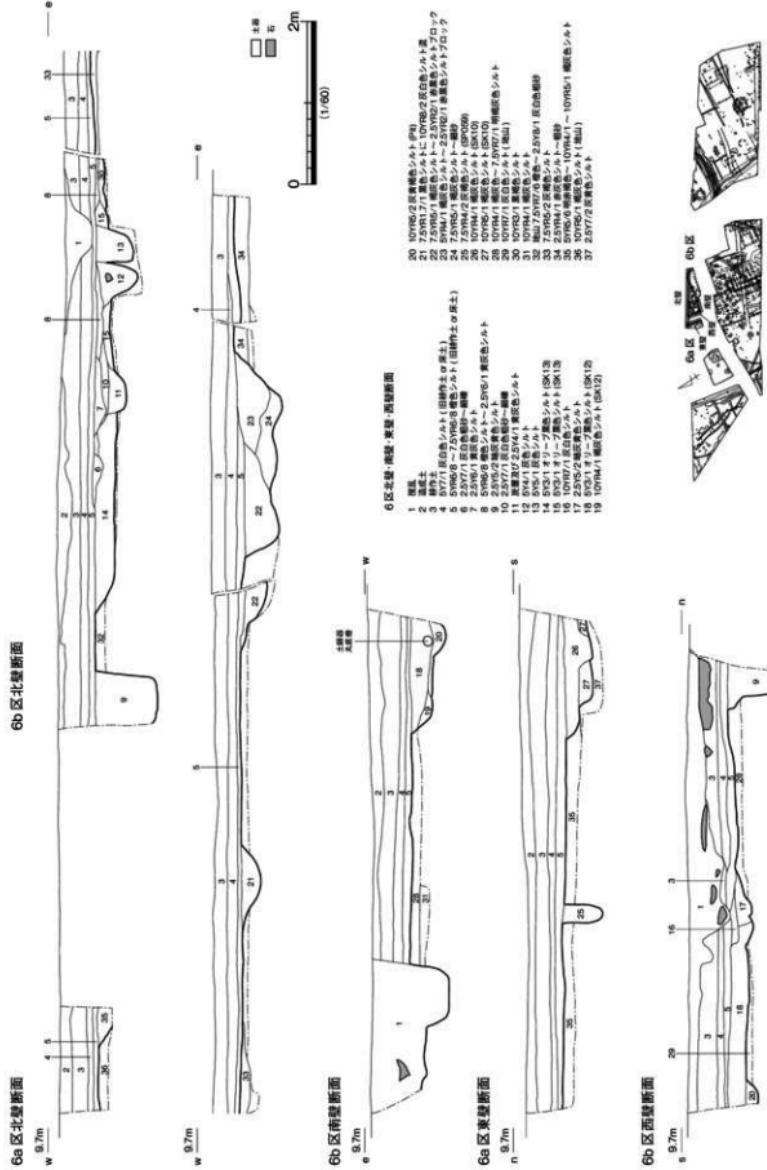
第2～3遺構面aのベースには、6層に細分された黄～灰白色系の細～粗砂・砂礫のラミナ堆積（同図37・40～42・45・47層）が確認され、埋没旧河道と考えられた。本河道からは、古代初頭を下限とする遺物が出土しており、当該期に機能していた流路と考え、その検出面を第3遺構面bとし、流路をSR01として調査を実施した。SR01からは多量の遺物が出土したが、調査工程の関係上、トレンチによる流路の残存深や埋土の堆積状況を確認したのみで、完掘までは至っていない。なおトレンチ底面で、無遺物層である明黄褐色粘土（同図48・49層、流路底面ではグライ化により緑灰色を呈する）の堆積が検出され、本層以下には遺構が存在しないことを確認した。

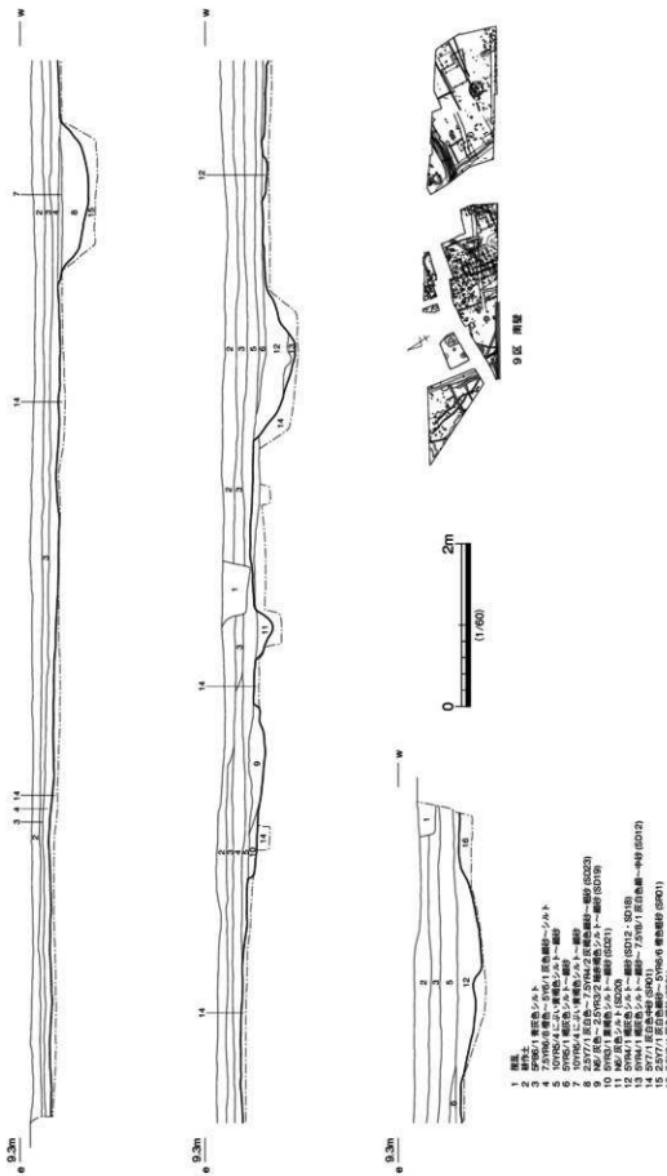




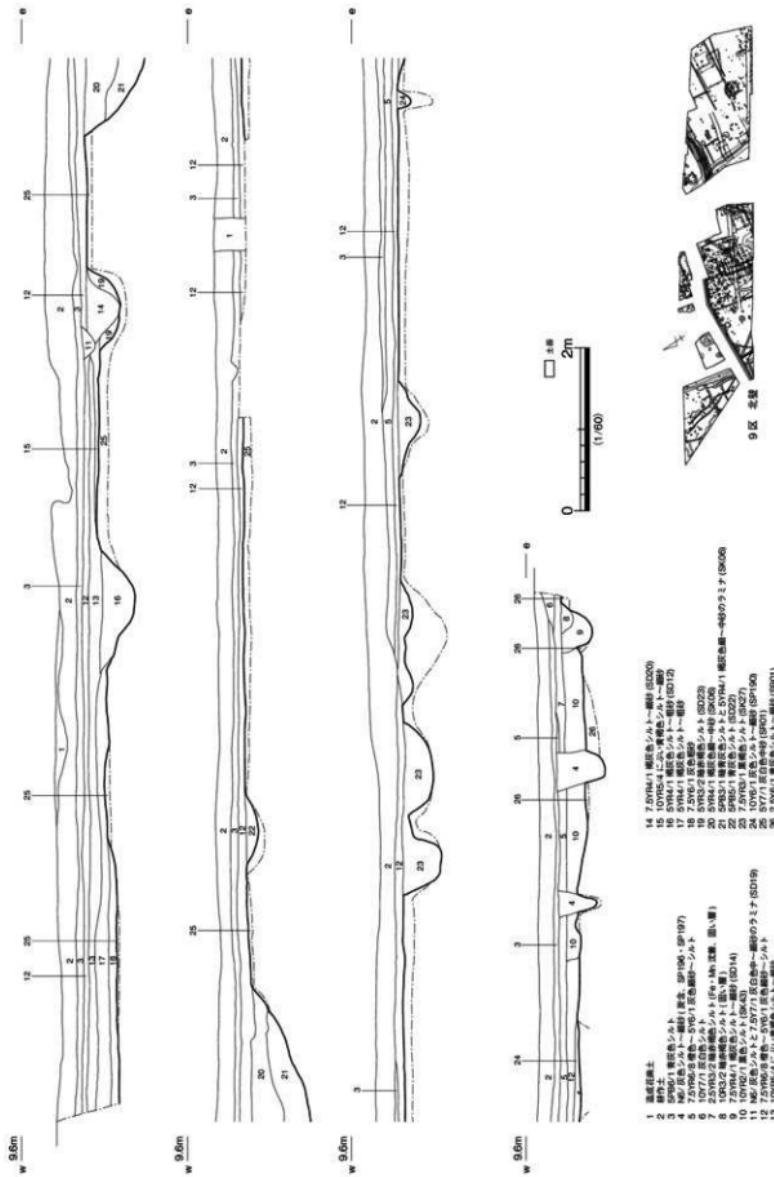
第7回 8区調査区南端土層断面図



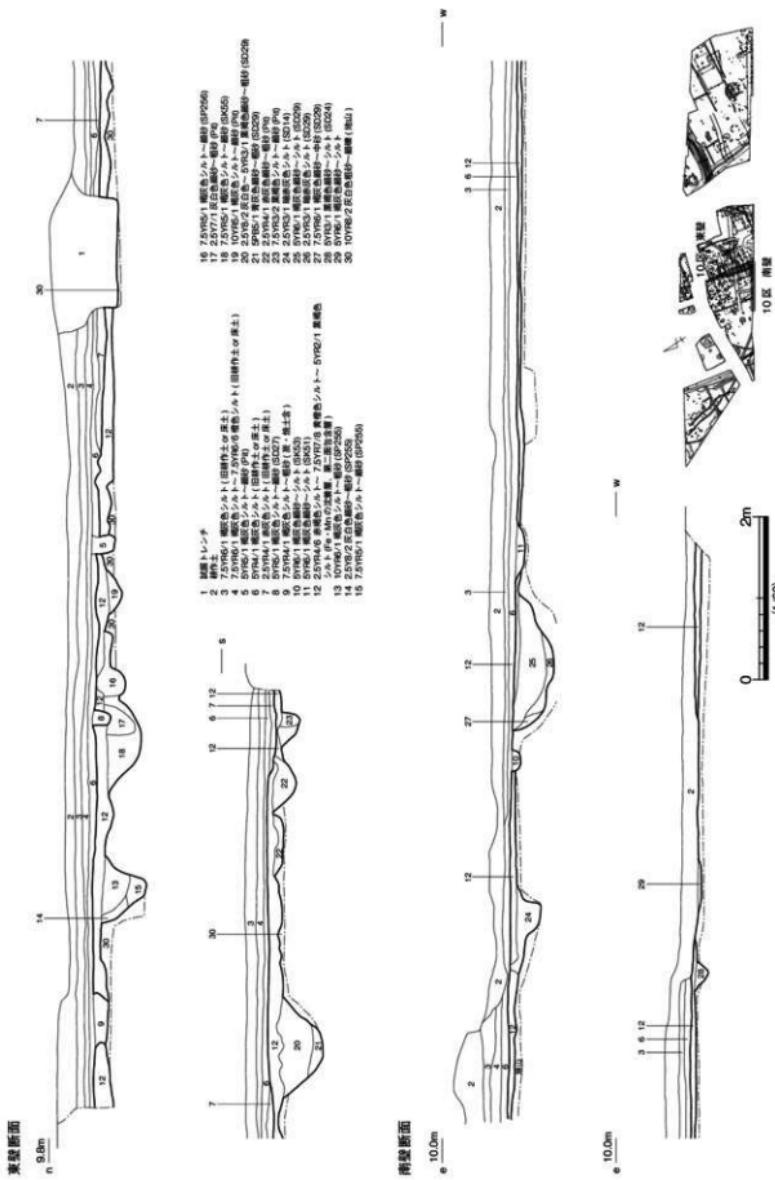


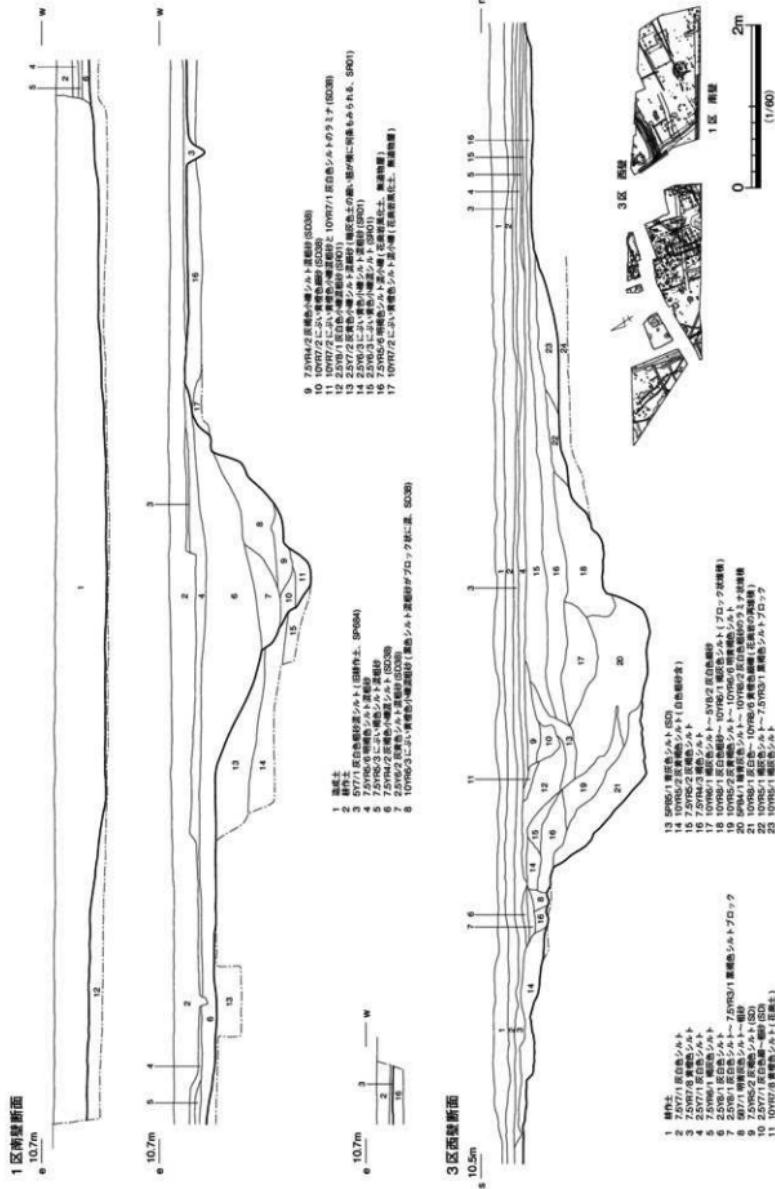


第10図 9区調査区南端土層断面図



第11図 9区調査区北壁土層断面図





第3節 遺構・遺物

弥生時代～古墳時代

SR01（第14～18図）

遺跡南側の丘陵裾部微高地に位置する、1区南西隅から8区南東隅を除くほぼ調査区全面において、前節で既述したように、第3遺構面aのベース層として流路堆積層を確認し、同層中より後述する遺物が出土した。本流路堆積層を以下SR01として報告する。SR01とした遺構は、部分的に観察された土層の堆積状況や遺物分布等より、おそらく複数の流路が重複して流下していたものと想像されるが、調査上の制約により、面的な流路の把握はなされていない。したがって、各流路の規模や重複関係、流下方向については特定できない。わずかに8区において、残存深約2.1mを確認したにとどまる。

埋土は、6層以上に細分され、基本的に上位に褐色系シルト層が、下位に灰色系砂礫～粘土等の水成層が堆積することで各調査区は概ね共通し、上面の削奪により、上位層の堆積が認められない調査区もあった。遺物は、上述した層序以上に細分して取り上げられていないため、後述する遺物の出土位置や時期幅から、細かな流路の埋没時期を特定することは困難である。

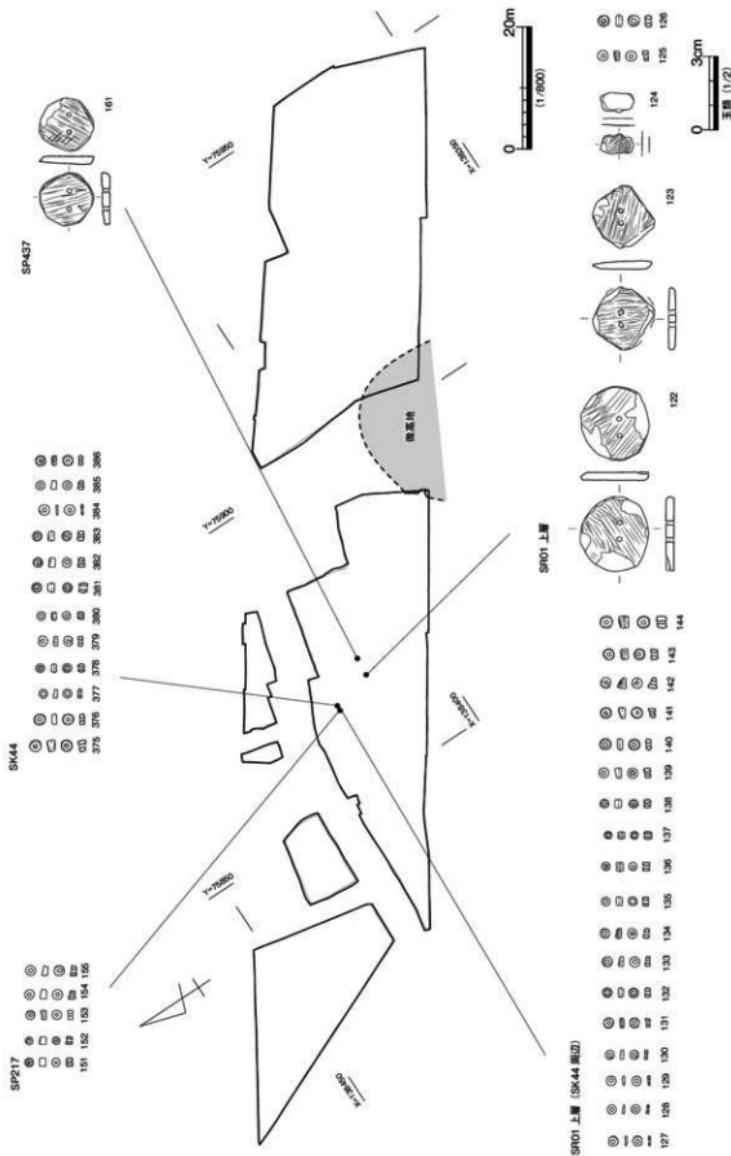
図示した遺物のうち、22・67・81・90・91・94・97・99・102・118・121～144が上層、11・17・28・30・41・50・52・56・58・60・61・63・71・72・74・104が下層出土の遺物である。それ以外については、正確な帰属層位は不詳である。

1～3は縄文時代晩期の突帯文土器深鉢の口縁部片。いずれも端部よりやや下がった位置に突帯を貼付し、D字形の刻目を施す。また口縁端面に刻目を施す1・2と、それを欠く3の2者がある。4は晩期前半に遡る浅鉢とみられる底部片である。5～8は弥生時代前期後半の壺。外面に9条以上のヘラ描沈線で飾る7と、4条以上の櫛描沈線で飾る6、無文のもの5・8がある。9も前期に遡る同壺で、頸部外面をヘラ描き沈線3条により加飾する。上述した遺物はいずれも4区から出土しており、他の調査区よりもやや古い時期の流路が存在した可能性が考えられる。

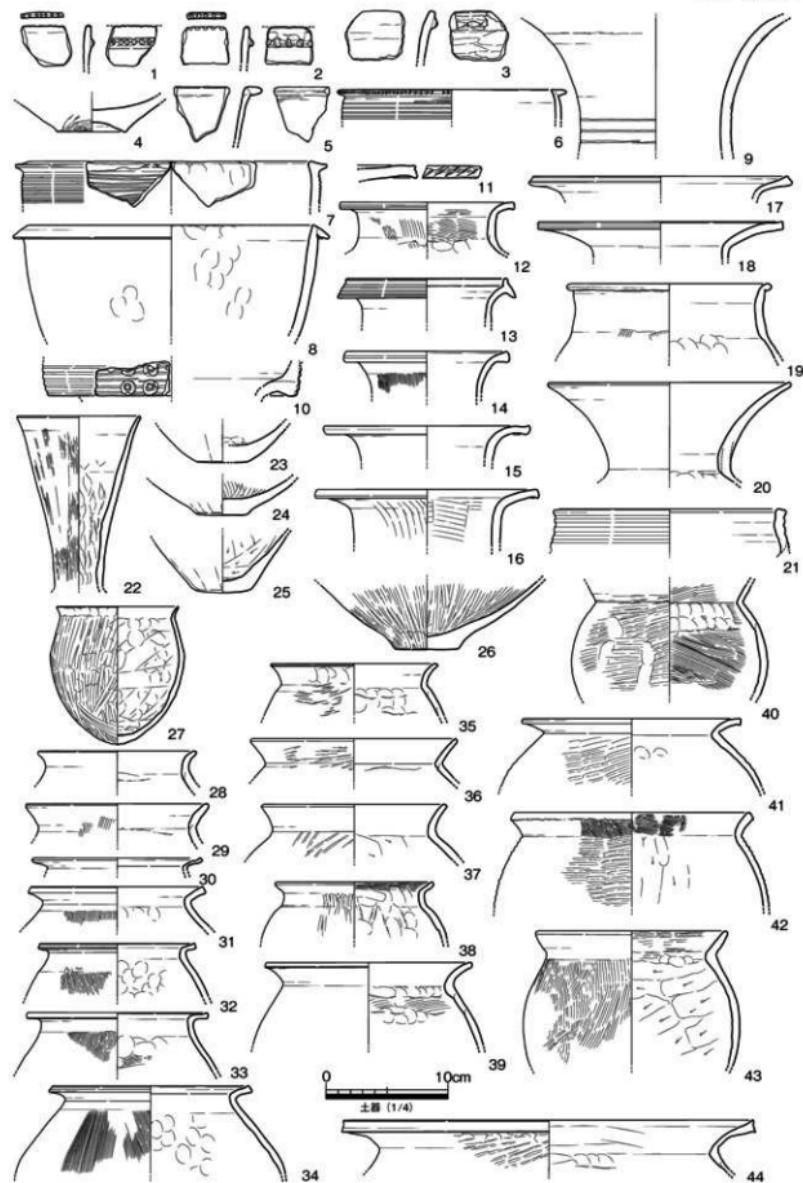
10～83は、弥生時代後期後半～終末期を中心とした土器で、一部に中期後葉の資料を含む。本流路の主体を占める資料で、基本的に下層を中心として出土した。10は5条以上の凹線と、4個1対の円形浮文で加飾した弥生土器二重口縁壺の小片。21も二重口縁壺の小片で、胎土中に結晶片岩粒を含み、阿波吉野川下流域からの搬入土器である。11～20は同広口壺ないし直口壺。17は22の細頸壺とともに、胎土中に角閃石粒を含む高松平野香東川下流域産の搬入土器である。18・20は布留式併行期に下る可能性がある。23～26は同壺もしくは鉢の底部片で、25は凸面底を呈する。26の内面には、入念なミガキ調整が施されていることから大型鉢と考える。

27～45は弥生土器壺。30～34は香東川下流域からの搬入土器である。36・40・44は、体部からの連続したタタキ調整により口縁部を形成する。43は布留壺を意識した作りで、体部は頸部付近まで削る。45は弥生時代前期に遡る可能性がある。46～54は同高杯。46・47は香東川下流域からの搬入土器である。49は列点文等で飾る、装飾高杯である。53の脚柱部は、下から見て時計回りに粘土紐を螺旋状に巻き上げて形成する。

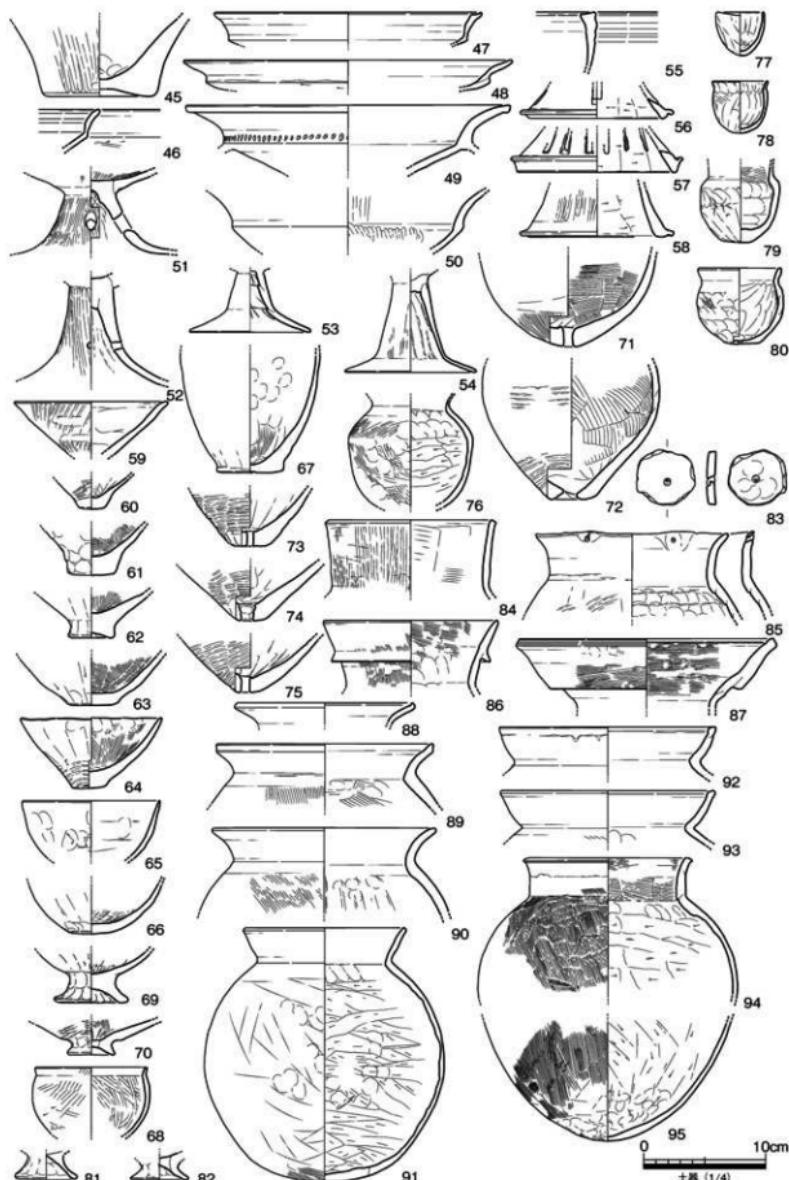
55～58は、中期後葉に遡る台付鉢である。55の口縁部には3条の凹線文を施す。56の外表面は、ベンガラにより赤色塗彩される。これら中期の資料は、10区を中心に出土している。59～70は後期後半～終末期を中心とした鉢ないしは台付鉢である。71～75は、底部に円孔を穿つ穿孔鉢。体部の球形化



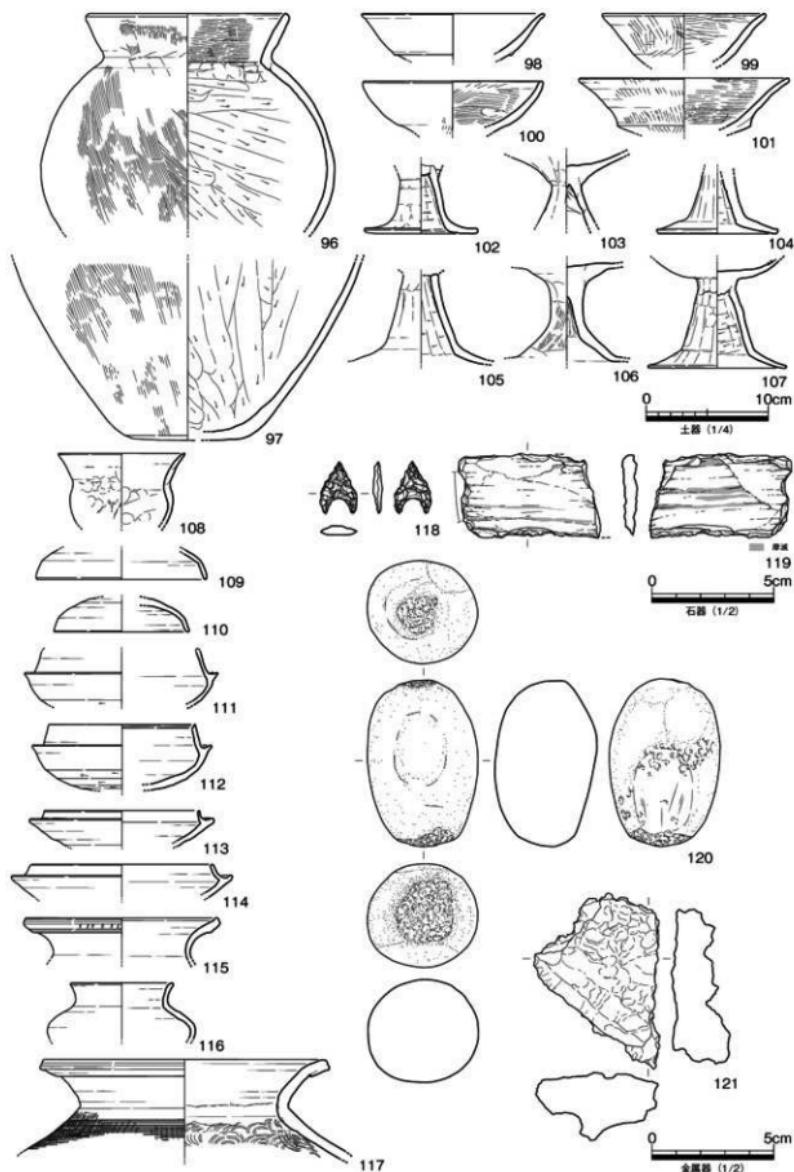
第14図 SR01平面・滑石製玉類出土位置図



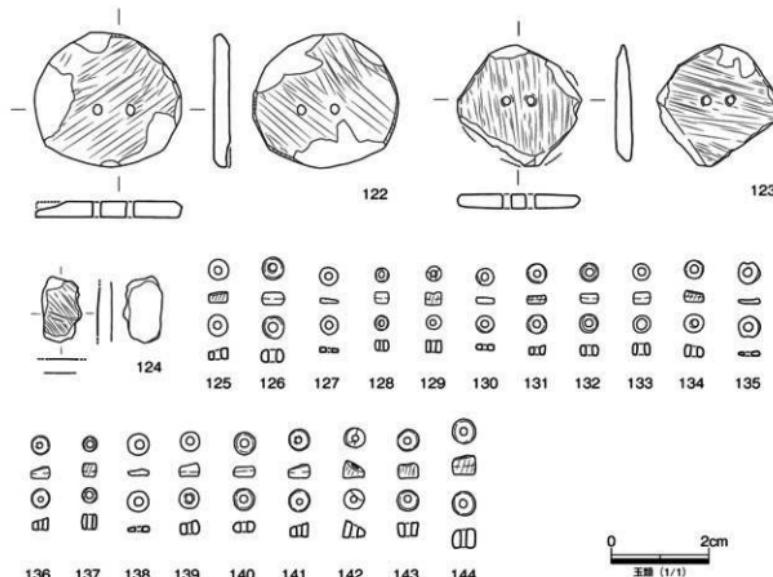
第15図 SRO1出土遺物実測図1



第16図 SRO1 出土遺物実測図2



第17図 SR01出土遺物実測図3



第18図 SR01出土遺物実測図4

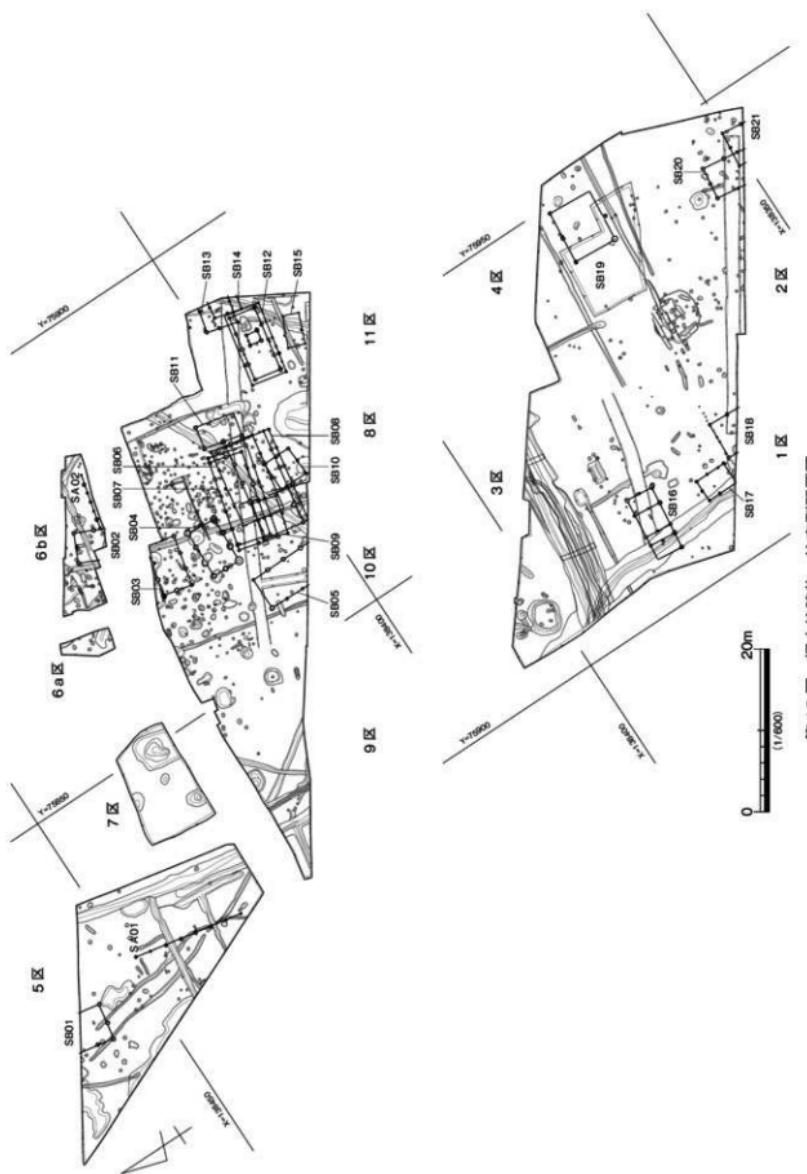
が著しい71・72は終末期に下る。76～80はミニチュア土器で、78・79はほぼ完成品である。80の底部には焼成前に小円孔を穿つ。81・82は、備讃三式の製塩土器。83は土器片を転用した紡錘車で、内外両面より穿孔する。

84～108は古墳時代前期初頭～同後葉を中心とした資料で、90等の後述する須恵器に共伴する後期前葉の資料を含む。主に上層を中心に出土した資料で、流路堆積の終期に近い時期の資料であろう。84～87は、古式土師器壺。85の口縁端部付近には焼成前に小円孔が穿たれ、口縁部が大きく歪む。87の口縁部外面には煤が付着する。88～97は同壺。88は東四国系壺の口縁部小片。89・90は、庄内壺を意識した模倣形態の可能性がある。90と97は近接して出土しており、接合はしないが同一個体の可能性がある。91～93・96は在地産の布留壺である。95の内外面には炭化物が付着する。98～107は同高杯。102等、脚柱部の多くは内面にケズリ調整を施す。108は粗製の小型丸底土器とした。

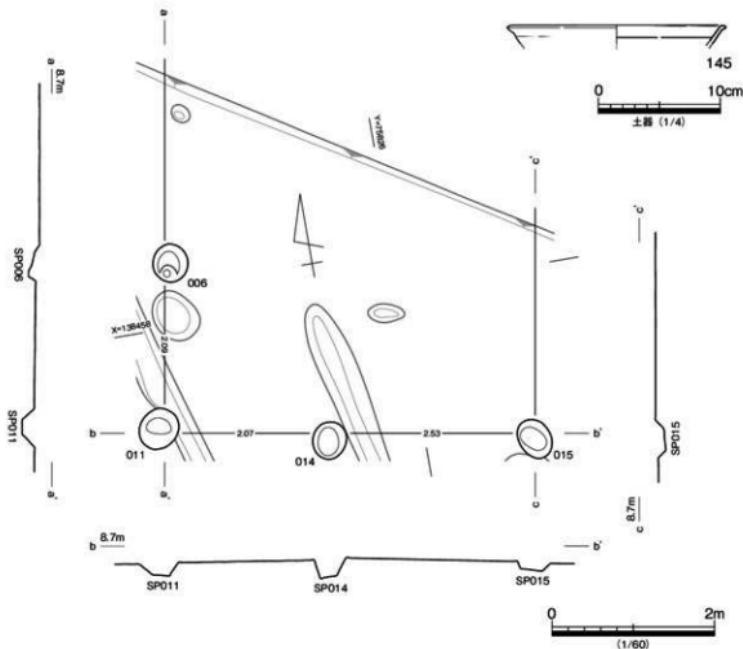
109～117は須恵器。111・112はMT15型式併行期前後、それ以外はTK43～TK209型式併行期前後に位置付けられる。いずれも出土状況の詳細は不明ではあるが、4区からまとまって出土しており、一部調査区においては当該期の流路堆積が削平を免れ残存した可能性を示すものと考えたい。

118はサヌカイト製の打製石鎌である。119は珪質片岩製の打製石庖丁で、阿波吉野川下流域からの搬入品である。表裏面に磨滅痕を認める。120は砂岩の円盤を利用した叩き石。上下両端部に顕著な敲打痕を認め、側面の一部を磨り石としても使用する。121は鉄滓である。本資料については、包含層もしくは中世遺構資料の混入の可能性は否定できない。

122～144は上層出土の滑石製品である。有孔円盤3点と白玉20点が出土した。出土位置



第19図 据立柱建物・柱穴列配置図

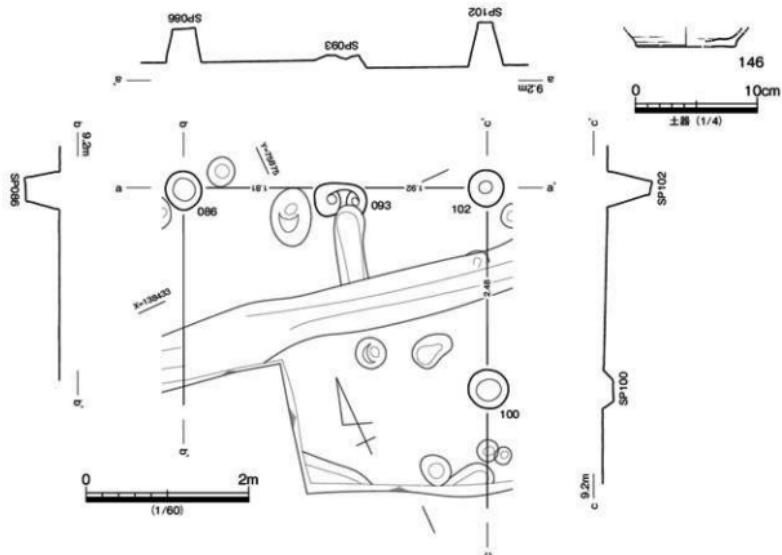


第20図 SBO1 平・断面・出土遺物実測図

は、後述する中世遺構への混入資料を含め、第14図に示したように10区北半部に集中する。出土分布を詳細にみると、SK44周辺では白玉のみが出土し、SP437周辺では有孔円盤を中心とする等、出土位置により種類が明瞭に相違する。両者間は約6.8m離れており、偶然性は想定しがたく、意図的に出土位置へそれぞれ投棄したと考えるのが妥当であろう。

以上の出土遺物より、本流路は下層が弥生時代後期後半から終末期前後に流下・堆積し、その後古墳時代前期後葉にかけて概ね上層の埋積が進行したものと考えられる。上述したように、一部調査区においてその後も継続して堆積環境にあった可能性も想定され、調査地周辺の平準化は古代まで下ると考えられる。なお、それ以前の遺物については、混入か別の流路が存在した可能性が考えられるが、調査において断定する成果は得られていない。出土遺物にローリング等が顕著には認められないことから、周辺に当該期の遺跡が展開した可能性が考えられる。

また、流路下層埋土について、珪藻分析と花粉分析を実施した。分析結果の詳細は第4章に掲載する。珪藻分析の結果、淡水生種よりも淡水～汽水生種が多く検出された。報告では、「排水が悪く水が停滞気味なために、水中の塩類濃度が高まつた可能性」を指摘する。しかし、淡水生種のなかでは流水性種が一定数を占めていること、遺跡は与田川下流に位置し、当時の海岸線を想定するなら、本遺跡が汽水域に立地していた可能性も想定される。遺跡周辺の古環境を考える上で重要な資料であり、隣接地域の分析例の追加を期待したい。



第21図 SB02 平・断面・出土遺物実測図

中世

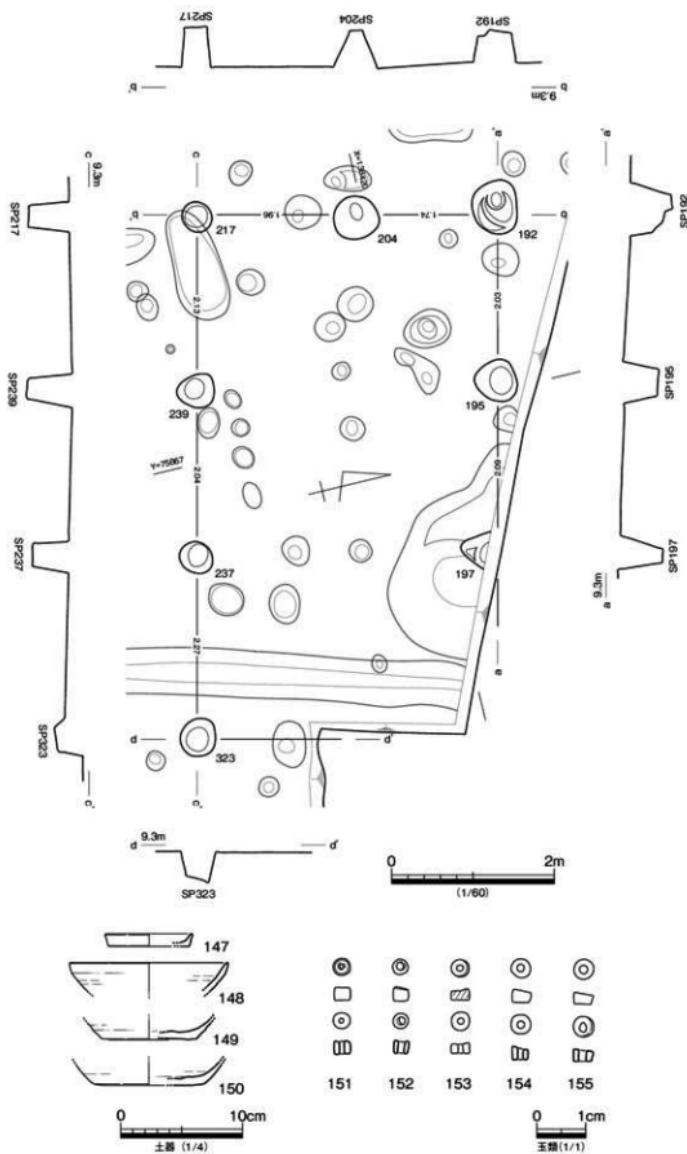
掘立柱建物

掘立柱建物は、7区を除く各調査区において総数20棟を検出した。SB08・12等いくつかの建物については、調査時にその復元を行ったが、その他多くの建物はすべて本書作成時に図上で復元した。したがって根石等の記録がなされていないものが含まれ、埋土等について必要な観察が行えていない等の課題が残る。また、建物の復元に際しては、柱穴間隔や平面形態に留意し、平面形態が矩形より著しく逸脱する、あるいは柱穴間隔が1.0m以下もしくは3.0m以上となる建物については、検出状況より蓋然性が高いと判断したもの以外は除外した。本書で提示した建物復元案は、以上の条件下で復元を試みたものであり、建物復元に至らなかった柱穴は多く、これらの位置付けについては、調査方法を含め、今後の課題としたい。なお、建物の時期については、柱穴内の出土遺物を主に根据としたが、建物主軸や周辺の遺構との関係も参考に決定した。

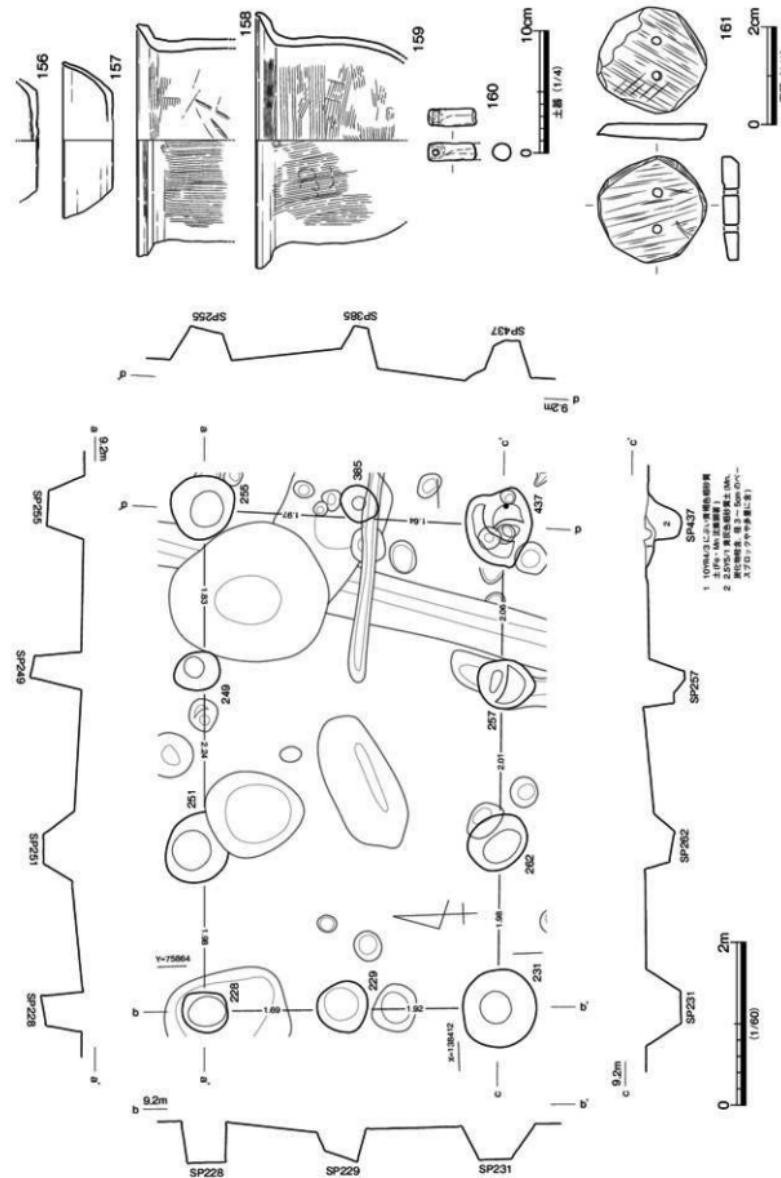
SB01（第20図）

5区北端部で検出した。梁間2間(4.61m)、桁行1間(2.0m)以上、床面積9.2m²以上、建物主軸N 987°Eに配された側柱建物として復元する。しかし、建物北半の大半は調査区外へ延長し、建物復元の妥当性については、隣接地の調査によって確認する必要がある。柱穴は、長径0.40～0.49mの平面円ないし楕円形を呈し、残存深は0.12～0.21mであった。

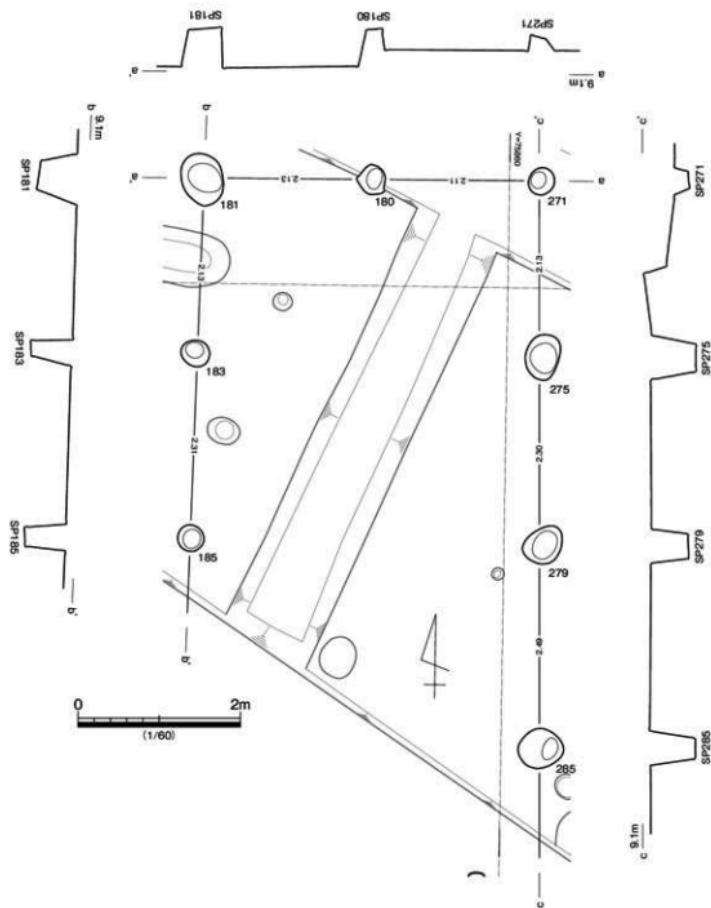
遺物は、弥生土器と白磁碗の小片が5点出土したのみである。145は、SP14より出土した大宰府分類白磁碗V類の口縁部小片である。



第22図 SB03 平・断面・出土遺物実測図



第23図 SB04 平・断面・出土遺物実測図

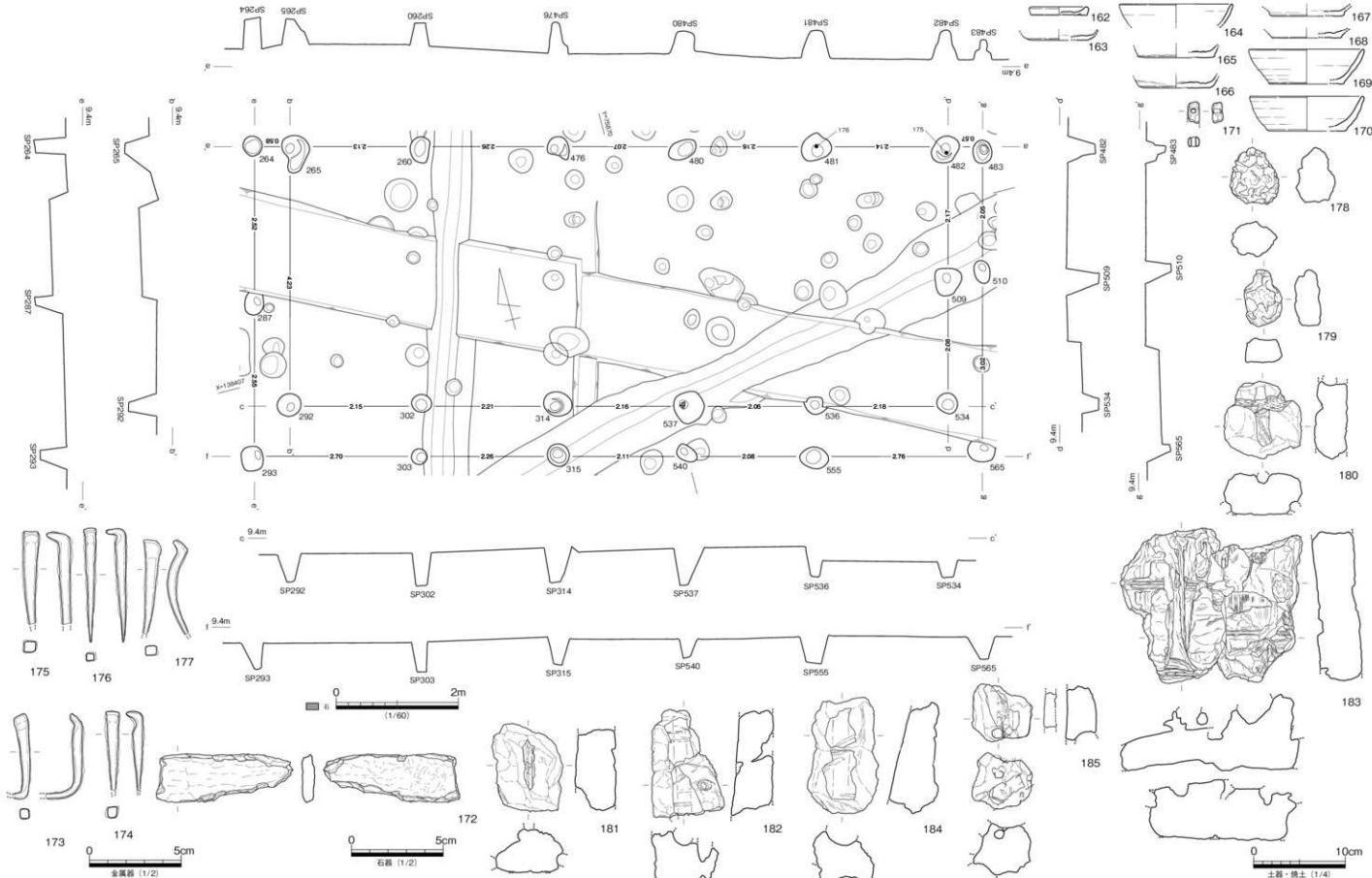


第24図 SB05 平・断面図

SB02（第21図）

6 b 区中央部で検出した掘立柱建物である。SD14 と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。SD14 と主軸方向がほぼ合致し、整った位置関係にあることから、SD14 と同時併存していた可能性は高い。梁間2間(3.71m)、桁行1間(2.48m)以上、床面積9.20m²以上、建物主軸N 24.95° E に配された、南北棟の側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.44～0.47mの平面円ないし梢円形を呈し、残存深は0.13～0.55mであった。

遺物は、SP102より須恵器杯や土師質土器皿・杯等の小片9点が、SP86より土師質土器皿・杯等の



第25図 SB06 平・断面・出土遺物実測図

小片 24 点が、SP93 より土師質土器皿・杯等の小片 11 点がそれぞれ出土した。146 は、SP93 より出土した土師質土器杯である。

SB03（第 23 図）

9・10 区北東隅から 8 区北西隅で検出した掘立柱建物である。北東隅部は調査区外に延長するが、およそその全形は確認された。切り合い関係より、9 区 SK14 より後出する。梁間 2 間 (3.70 m)、桁行 3 間 (6.44 m)、床面積 23.84m²、建物主軸 N 76.461°W に配された、東西棟の側柱建物として復元する。柱穴は、長径 0.33 ~ 0.64 m の円もしくは楕円形を呈し、底面の標高は 8.50 ~ 8.83 m と一定しない。

147 ~ 149 は SP192 より、150 は SP195 より出土した、それぞれ土師質土器皿・杯である。151 ~ 155 は、SP217 より出土した滑石製白玉で、既述したように本来は SR01 に帰属する混入資料であろう。出土遺物より、佐藤編年中世 II-4 ~ II-5 期に位置付けられる。

SB04（第 23 図）

10 区北東隅から 8 区北西隅で検出した掘立柱建物である。SK46、SK49、SK55、SD14、SD27 と重複し、切り合い関係より SK49 より先行し、その他の遺構より後出する。梁間 2 間 (3.61 m)、桁行 3 間 (6.05 m)、床面積 21.84m²、建物主軸 N 88.603°W に配された、東西棟の側柱建物として復元する。柱穴は、長径 0.34 ~ 0.97 m の平面円もしくは楕円、歪な隅丸方形を呈し、底面標高は 8.40 ~ 8.60 m とやや幅を認める。

出土遺物は、弥生土器や土師器 158・159、須恵器 156 等の混入資料が多くを占めるものの、各柱穴より土師質土器皿・杯や瓦器碗等の小片が若干量出土している。157 は SP385 出土の土師質土器杯である。161 は、SP437 出土の滑石製有孔円盤で、SR01 からの混入資料であろう。出土遺物より、佐藤編年中世 II-2 期を中心とした時期に位置付けらよう。

SB05（第 24 図）

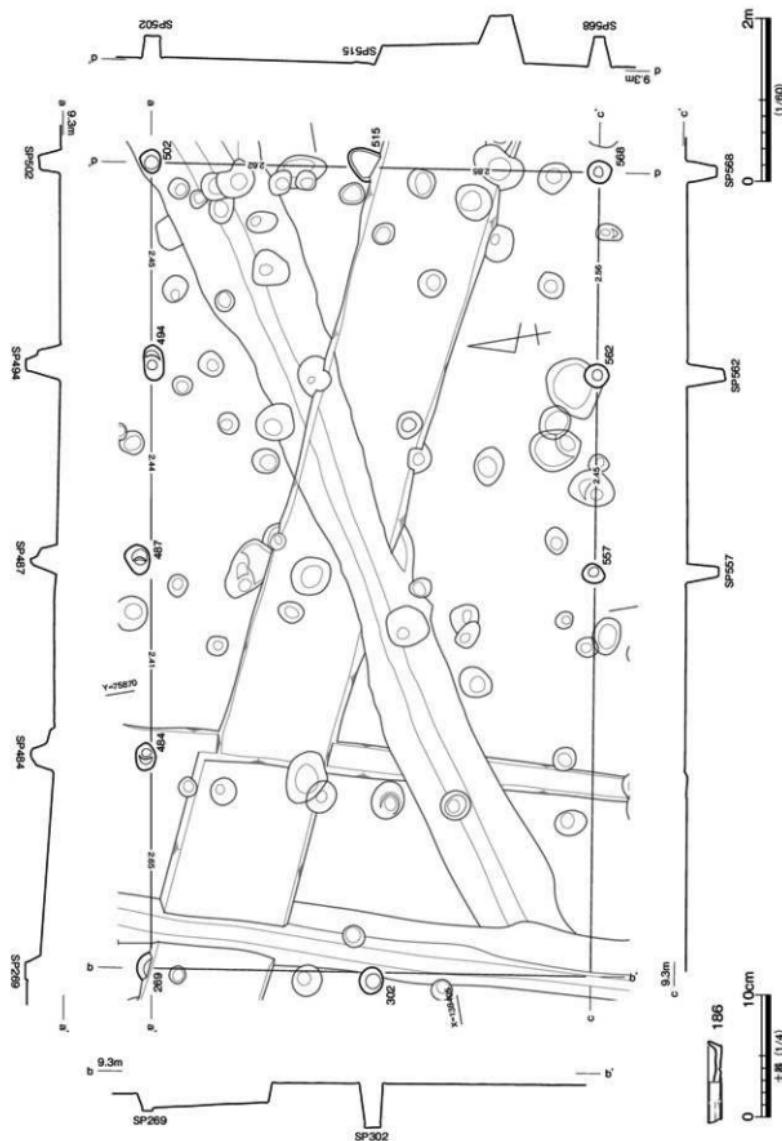
10 区南端部で検出した掘立柱建物である。南半部は調査区外へ延長し、全形は不明である。梁間 2 間 (4.24 m)、桁行 3 間 (6.93 m) 以上、床面積 29.38m² 以上、建物主軸 N 0.17°E に配された、南北棟の側柱建物として復元する。柱穴は、長径 0.33 ~ 0.66 m の平面円ないし楕円形を呈し、底面標高は 8.43 ~ 8.52 m と概ね一定であった。

遺物は、SP271・SP279 を除く各柱穴より、土師質土器等の小片が各数点出土したのみである。

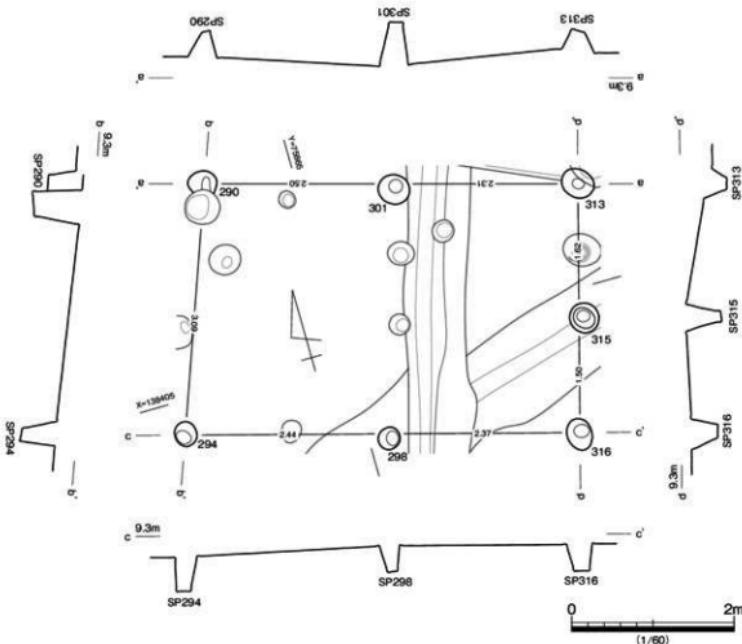
SB06（第 25 図）

8 区南西隅部を中心に、ほぼ同位置で重複して検出された、後述する SB07・SB08 と共に、屋敷地の主屋と考えられる大型建物である。3 棟の建物主軸はそれぞれ若干相違するが、ほぼ同規模の東西棟側柱建物であることから、建て替えによる 3 時期の変遷が想定される。しかし、いずれも柱穴は重複せず、先後関係は不明である。なお、切り合い関係より、SD14 より後出する。

SB06 は、3 棟の建物のうち最も北に位置し、梁間 2 間 (4.23 m)、桁行 5 間 (10.76 m)、床面積 45.57m²、建物主軸 N 75.50°W に配された、北面を除く 3 面に庇を付した東西棟側柱建物として復元する。柱穴は、長径 0.26 ~ 0.61 m の平面円や楕円、不整方形等を呈し、身舎部分の底面標高は 8.56 ~ 8.80 m とやや幅を認める。



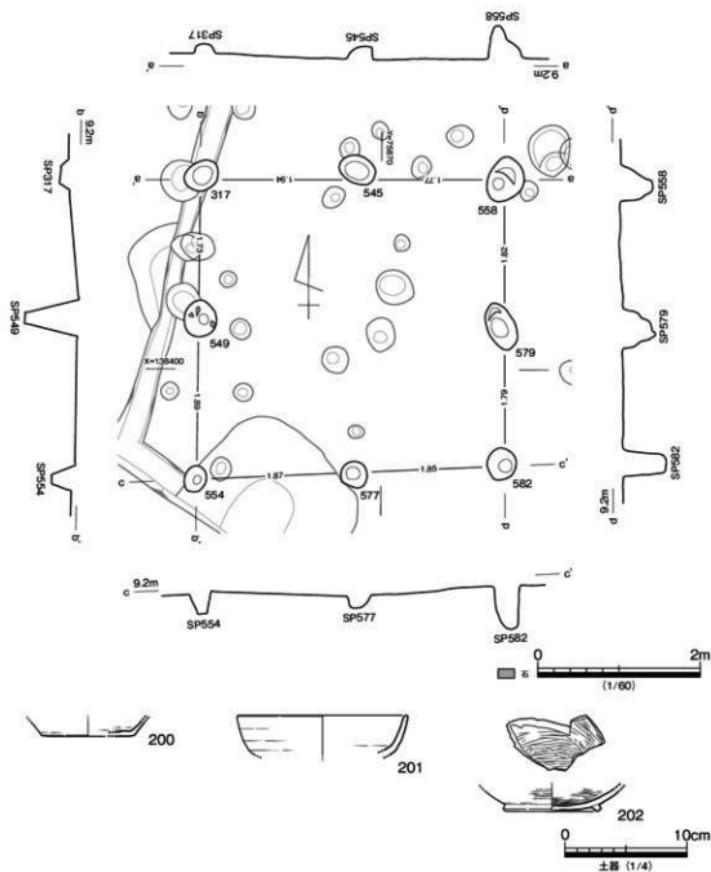
第26図 SB07 平・断面・出土遺物実測図



第28図 SB09 平・断面図

遺物は、一部の柱穴を除いて土師質土器皿等が一定量出土している。162はSP480、163はSP555より、それぞれ出土した土師質土器皿である。SP555からはほかに、棒状土錐171が出土している。164はSP481より、165・166はSP480より、167・169・170はSP537より、168はSP293より、それぞれ出土した同杯である。165は底部外面系切りの可能性がある。167は根石埋土より出土した。

180はSP534出土の土壁小片で、縦方向に3本、横方向に1本の木舞が組まれ、それらを結束した荒縄痕が残る。木舞周辺は黒化する。181・184はSP537より出土した土壁小片で、181では図上面と側面に3本の木舞が縦方向に組まれ、裏面はほぼ平坦である。184は径約3.5cmとやや太い木舞が使用され、壁土中には多量にスサが混入される。182・183はSP476出土の土壁片。182は縦方向に径約2.5cmの木舞が走り、それと直交するよう長径15cm程度のやや細い木舞が組まれる。細い木舞の先端は鈍く尖り、壁土内で収束する。外面2面はほぼ直交し、片面にはスサが多量に認められるが、もう片面は比較的平坦であり、柱材に接していた可能性が考えられる。183は径約5.5cmの木舞を最大として、径約1.5cmの細い木舞などが2段にそれぞれ十字に組まれ、最大厚8.1cm以上の土壁を作る。図下面はほぼ平坦で、スサの混入がやや多量に認められる。185はSP481出土の壁土で、図長軸方向に径約1.2～3.0cmの3条の木舞と、図下端面にそれらと斜交する径約2cmの木舞が認められる。鉄釘5点（173～177）は、いずれも4～6mm角程度の角釘である。179はSP302出土の鉄滓である。172はSP482出土の珪質片岩剥片で、おそらくは打製石砲丁として使用されたと考えられ、SR01からの混入資料であろう。



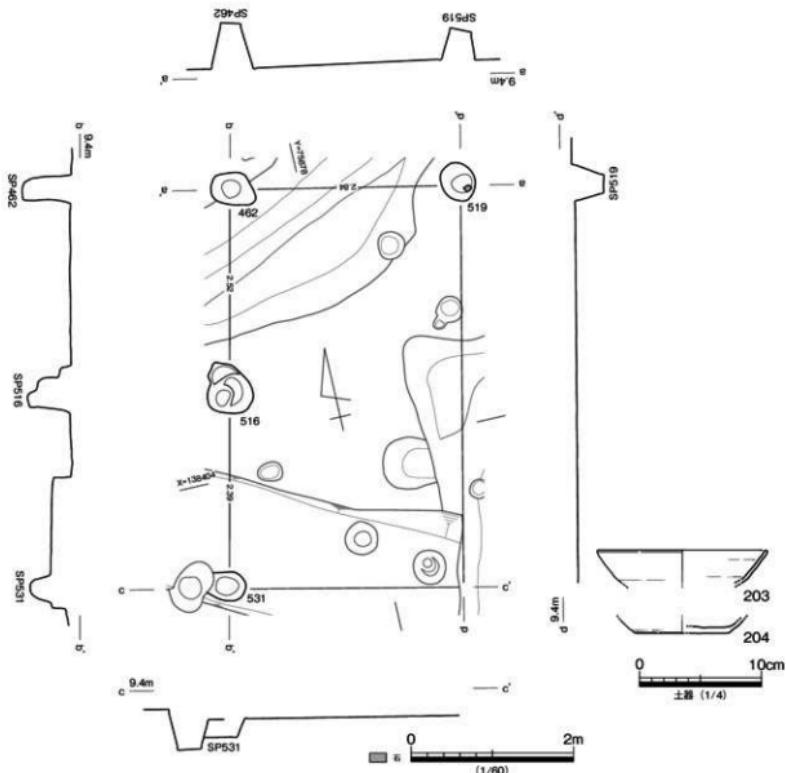
第29図 SB10 平・断面・出土遺物実測図

出土遺物より、佐藤編年中世II-2～II-4期に位置付けられる。

SB07（第26図）

既述したように、主屋と考えられる大型建物で、SB06～SB08の3棟のなかでは、中央に位置する。一部柱穴を欠落するが、梁間2間(5.52m)、桁行4間(9.90m)、床面積54.60m²、建物主軸N80.17°Wに配された、東西棟側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.28～0.45mの平面円ないし稍円形を呈し、底面標高は8.61～9.26mと一定しない。

遺物は、SP269とSP515を除いた各柱穴より、土師質土器皿や瓦器等の小片が少量出土した。186はSP494出土の土師質土器皿である。遺物に乏しいが、SB07は佐藤編年中世II-3～II-5期に位置付けられ



第30図 SB11 平・断面・出土遺物実測図

れる。

SB08（第27図）

SB08は、主屋と考えられるSB06～SB08の3棟のなかでは最も南に偏して配された建物で、南西隅の底の柱穴は調査区外に位置する。3棟のなかでは、身舎部分の床面積が最大となる。梁間2間(5.02m)、桁行5間(12.24m)、床面積61.48m²、建物主軸N80.25°Wに配された、南面に庇を有する東西棟側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.27～0.69mの平面円ないしは梢円形を呈し、身舎部分の底面標高は8.44～9.00mと一定しない。

遺物は、ほぼすべての柱穴より、土師質土器等の小片が一定量出土した。また、少量だが鉄滓や焼土塊が出土している。187はSP301より、188はSP581より、189・192はSP580より、190はSP305より、191はSP525より、それぞれ出土した土師質土器杯である。南西隅柱SP297からは、完形に近い土師質土器杯193・194や角釘198が出土した。194は、外底面を中心に煤が厚く付着し、煮沸具として使

用された可能性が考えられる。また、193も内外面に薄く煤が付着していた可能性があり、出土状況から地鎮等の祭祀に用いられた可能性が考えられる。195はSP548出土の土師質土器碗で、体下半部外側に「井」状の文字もしくは記号を線刻する。196はSP524より出土した瓦質土器風炉である。後述するSD31出土資料743と同一個体の可能性もあるが、接合関係にないため不明である。類例は、広島県草戸千軒町遺跡より出土しており、13世紀後半の年代が想定されている。出土遺物より、佐藤編年中世II-2～II-4期に位置付けられる。

SB09（第28図）

10区南東隅部で検出した掘立柱建物である。SB06、SB08、SD14と重複し、切り合い関係よりSB08より先行し、SB06とは本建物梁間東列中央穴とSB06南面庇の柱穴とが重複するが、埋土等の確認がなされていないため、先後関係は不明である。また、SD14とも切り合い関係なく先後関係は不明である。梁間2間(3.10m)、桁行2間(4.80m)、床面積14.88m²、建物主軸N 73.604°Wに配された、側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.28～0.41mの平面円ないしは楕円形を呈し、底面標高は8.61～8.84mとやや幅を認める。

遺物は、SP290以外の柱穴より、土師質土器皿・杯や瓦器碗等の小片が出土している。

SB10（第29図）

8区南西隅部で検出した掘立柱建物である。切り合い関係より、SK55よりも後出す。梁間2間(3.61m)、桁行2間(3.77m)、床面積13.58m²、建物主軸N 88.61°Wに配された、東西棟側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.34～0.61mの平面楕円形を呈し、底面標高は8.53～8.99mと一定しない。

遺物は、SP545以外の柱穴より土師質土器皿・杯や黒色土器碗等の小片が若干量出土している。200・201はそれぞれ、SP554とSP558より出土した土師質土器杯である。202はSP582より出土した黒色土器碗である。出土遺物より、佐藤編年中世II-1期を中心とした時期に位置付けられる。

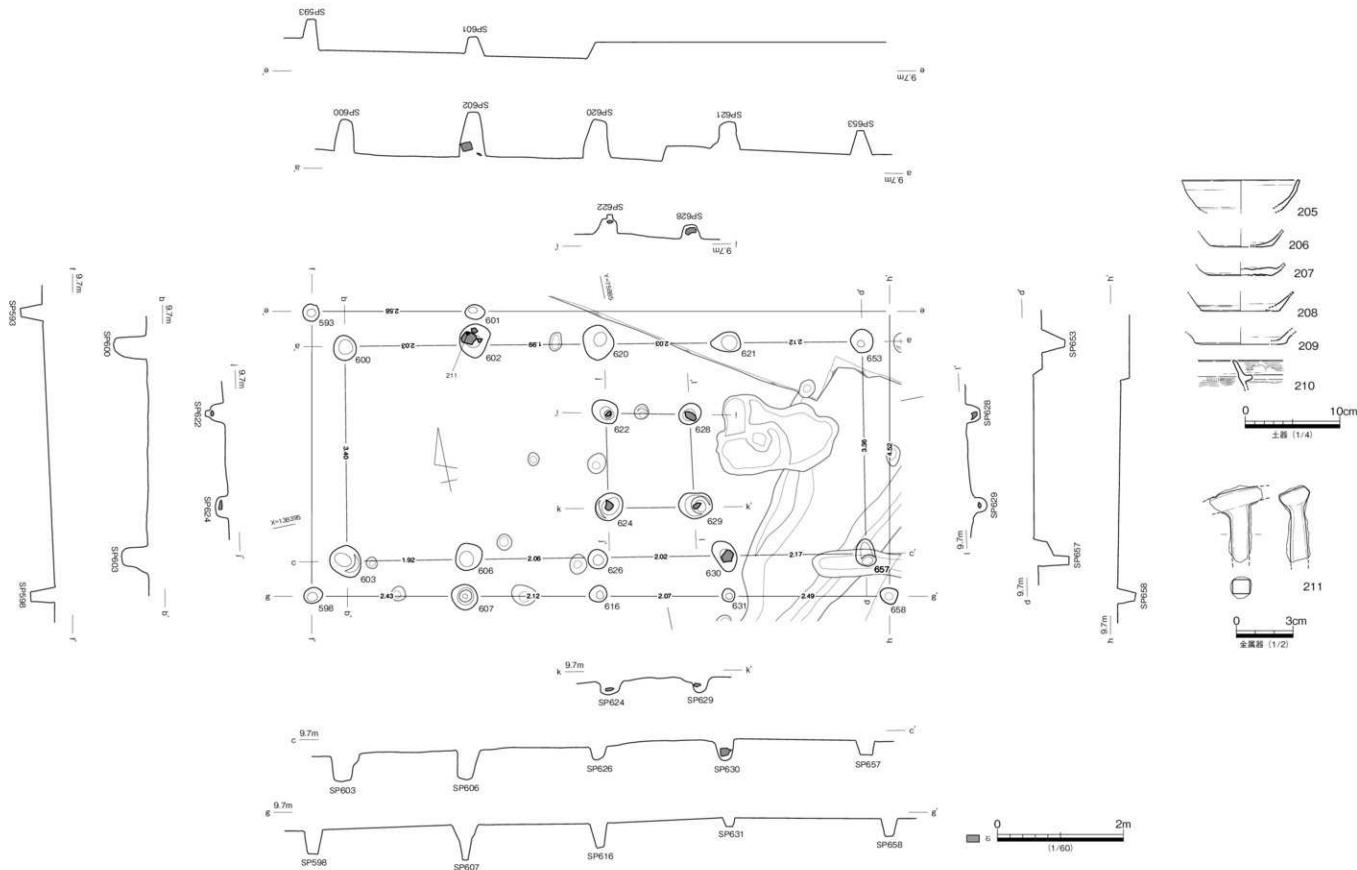
SB11（第30図）

8区中央東部で検出された掘立柱建物である。桁行東列南2穴を、SK65と重複して欠落することから、SK65より先行する建物と考える。また、桁行長は、西に隣接するSB06の庇部を加えた梁間長と一致し、また建物主軸も近似することから、同時併存していた可能性が考えられる。梁間1間(2.84m)、桁行2間(4.91m)、床面積13.93m²、建物主軸N 12.99°Eに配された、南北棟側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.47～0.69mの平面楕円形を主として呈し、底面標高は8.68～8.84mとやや幅を認める。

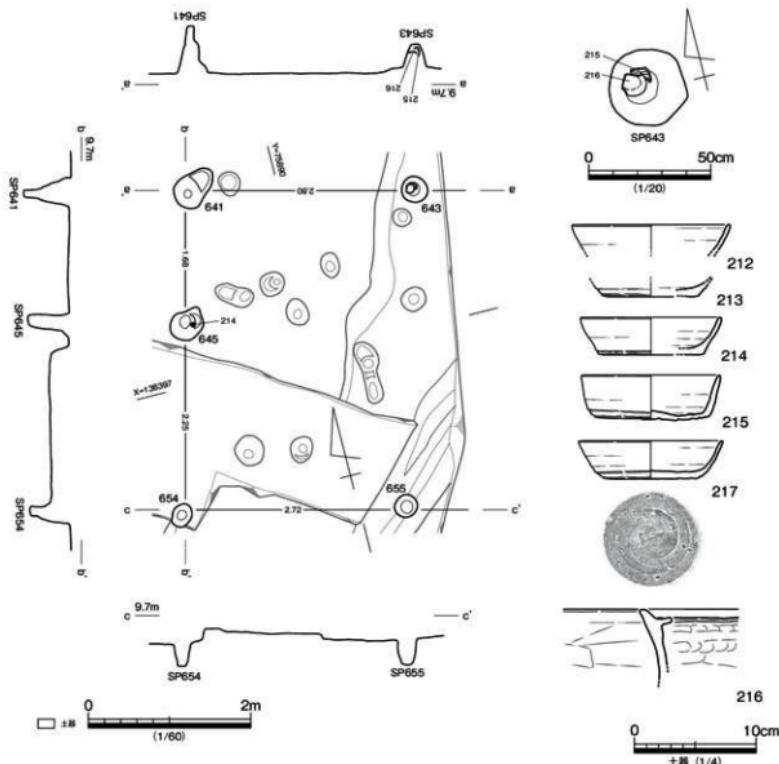
遺物は、各柱穴より土師質土器皿等の小片が若干量出土している。また、北西隅柱より多量の焼土塊が出土している。203・204は、SP516より出土した土師質土器杯である。遺物は乏しいが、SB11は佐藤編年中世II-1～II-2期と考えられる。

SB12（第31図）

11区東半部で検出した掘立柱建物である。試掘トレンチにより、北列庇の東3穴を欠く。梁間1間(3.38m)、桁行4間(8.22m)、床面積27.80m²、建物主軸N 79.19°Wに配された四面庇の東西棟側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.21～0.55mの平面円ないしは楕円、不整形方等を呈し、底面標高は身



第31図 SB12平・断面・出土遺物実測図



第32図 SB13 平・断面・出土遺物実測図

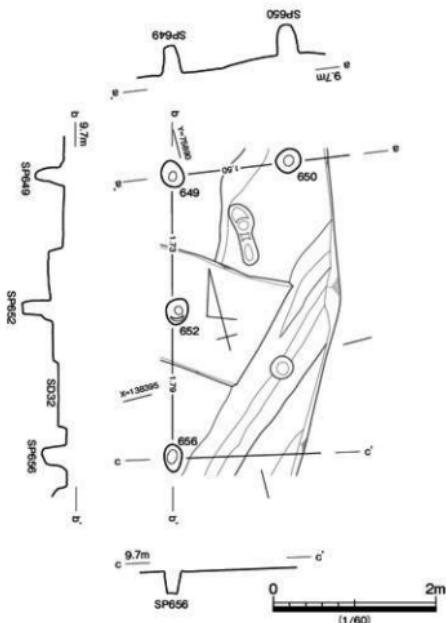
舍部分で 8.79 ~ 9.26 m と幅を認め、おおよそ桁行北列が深く掘り込まれていた。

なお、建物中央東寄りに、1間 (1.3 ~ 1.45 m) 四方の柱列が確認され、主軸方向が本建物と一致し、南北幅が本建物のほぼ中央に配されること、西柱列が本建物桁行西より2間目の柱とはほぼ一致することから、本建物に関係する柱列であり、内陣状の施設の可能性を考える。

遺物は、SP618 を除く各柱穴より土師質土器皿等の小片が若干量出土している。205 は SP602、206 は SP626、207 は SP657、208 は SP603、209 は SP607 出土のそれぞれ土師質土器杯である。210 は SP602 より出土した同足釜である。211 は、SP602 出土の鐵器で、用途は不明。出土遺物には若干古い様相が認められるものの、SB12 は佐藤編年中世II - 4期を前後する時期に位置付けられる。

SB13 (第32図)

11区東端で検出した掘立柱建物である。建物東半部は調査区外へ延長し、全形は不明。SD12 と重複し、切り合い関係より後出する。柱間間隔が長い、東西列を桁行として復元する。梁間2間 (3.92 m)、



第33図 SB14 平・断面図

位置で重複し、建物方向や規模が近似することから、建て替えの関係を想定する。梁間2間(3.52m)、桁行1間(1.50m)以上、床面積5.28m²以上、東西棟側柱建物の可能性を想定する。柱穴は、長径0.31～0.34mの平面楕円形を呈し、底面標高は9.02～9.28mとやや幅を認める。

遺物は、各柱穴より土師質土器皿等の小片が極少量出土している。

SB15(第34図)

11区南東隅で検出した掘立柱建物である。SD31・SD32と重複し、切り合い関係よりSD32より後出し、SD31より先行する。桁行北列中央穴がやや北に偏し、平面形は歪な台形状を呈するが、その他の柱穴は概ね整って配されることから、復元案として提示する。梁間1間(2.07m)、桁行2間(3.97m)、床面積8.20m²、建物主軸N 68.47°Wに配された、東西棟側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.16～0.26mの平面円もしくは楕円形を呈し、底面標高は9.26～9.42mで、北西隅柱を除けば概ね一致する。

遺物は、南東隅柱より土師質土器足釜218等の小片4点が出土したのみである。出土遺物より、楠井編年第II段階第2期に位置付けられると考える。

SB16(第35図)

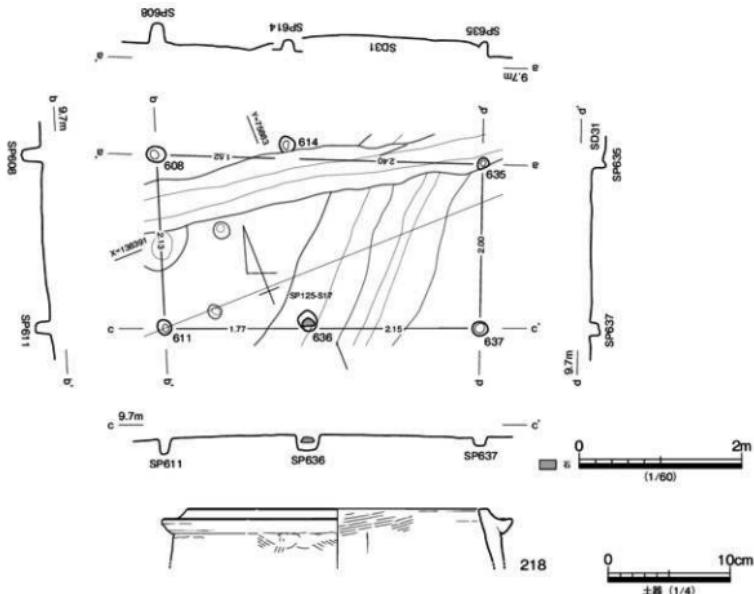
1区北西部で検出した掘立柱建物である。SD38と重複し、切り合い関係より後出する。また、北西

桁行1間(2.76m)以上、床面積10.83m²以上、東西棟側柱建物の可能性を想定する。柱穴は、長径0.29～0.57mの平面円ないし楕円形を主とし、底面標高は8.96～9.21mとやや幅を認める。

遺物は、各柱穴より土師質土器皿等の小片が若干量出土している。212・214はSP645、213・215・216はSP643よりそれぞれ出土した土師質土器杯である。215・216は完形に近く復元される資料で、柱穴底面より重なって出土しており、地鎮に関する遺物の可能性が考えられる。217はSP645より出土した同足釜で、体部には煤が厚く付着する。出土遺物より、佐藤編年中世II・3～II・4期に位置付けられると考える。

SB14(第33図)

11区東端で検出した掘立柱建物である。建物東半部は調査区外へ延長し、全形は不明。SD12と重複し、切り合い関係より後出する。また、上述したSB13とはほぼ同



第34図 SB15 平・断面・出土遺物実測図

隅柱を欠く。梁間2間(3.42 m)、桁行4間(8.20 m)、床面積28.08m²、建物主軸N 83.36°Wに配された、床束建物を復元する。柱穴は、長径0.23～0.78 mの平面円ないしは梢円形等を呈し、底面標高は9.25～9.86 mと一定しない。

遺物は、一部の柱穴を除いて、土師質土器皿等の小片が若干量出土した。219はSP679より、220～221はSP698よりそれぞれ出土した。出土遺物より、佐藤編年中世II-2期前後に位置付けられる。

SB17（第36図）

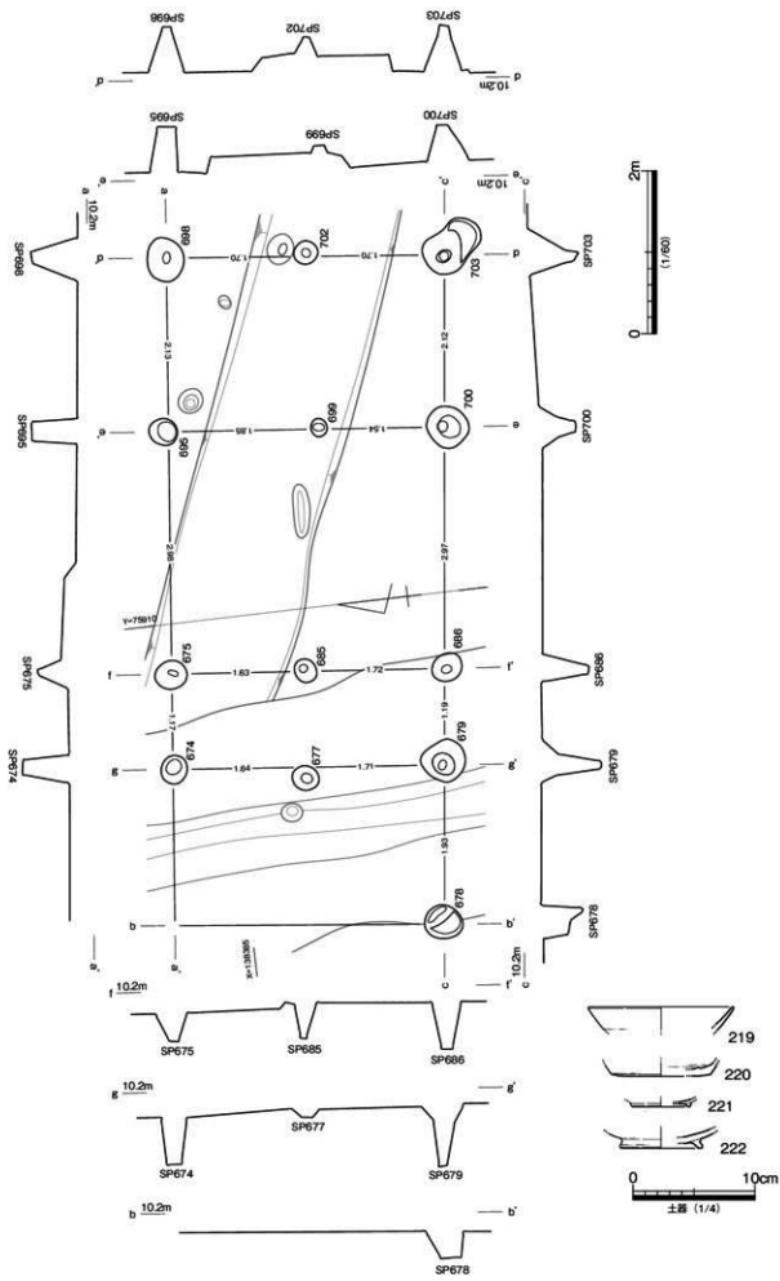
1区南西部で検出した掘立柱建物である。SD38と重複し、切り合ひ関係より後出する。梁間2間(2.84 m)、桁行3間(4.00 m)、床面積11.37m²、建物主軸N 0.43°Wに配された、南北棟側柱建物を復元する。柱穴は、長径0.26～0.46 mの平面円ないし梢円形等を呈し、底面標高は9.44～9.86 mと一定しない。

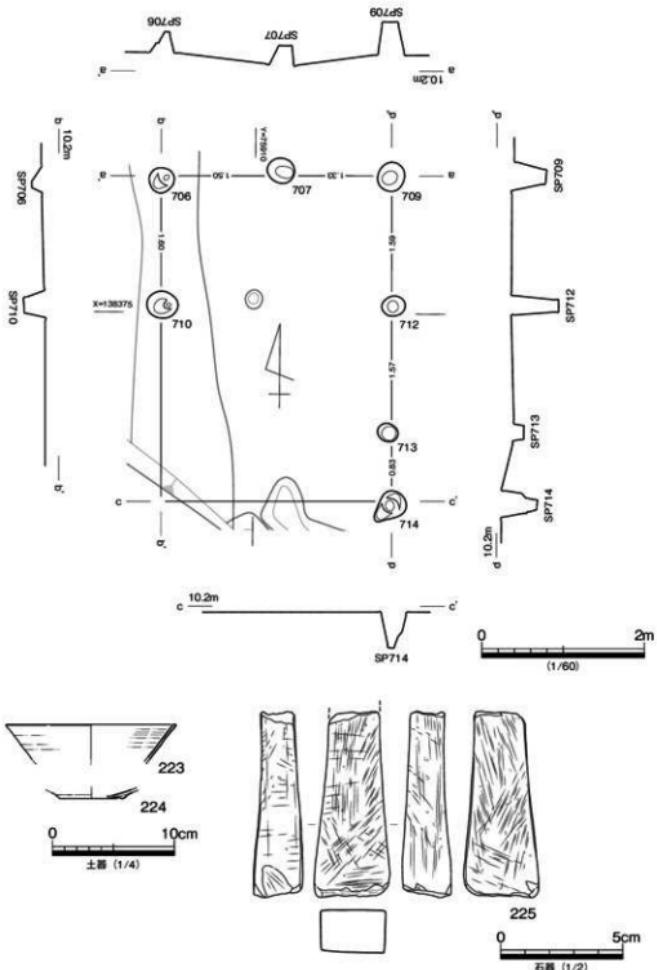
遺物は、すべての柱穴より、土師質土器等の小片が少量出土した。223・224はSP714より出土した土師質土器、225はSP712より出土した方柱状を呈する流紋岩製の砥石である。出土遺物より、佐藤編年中世II-2期を中心とした時期に位置付けられる。

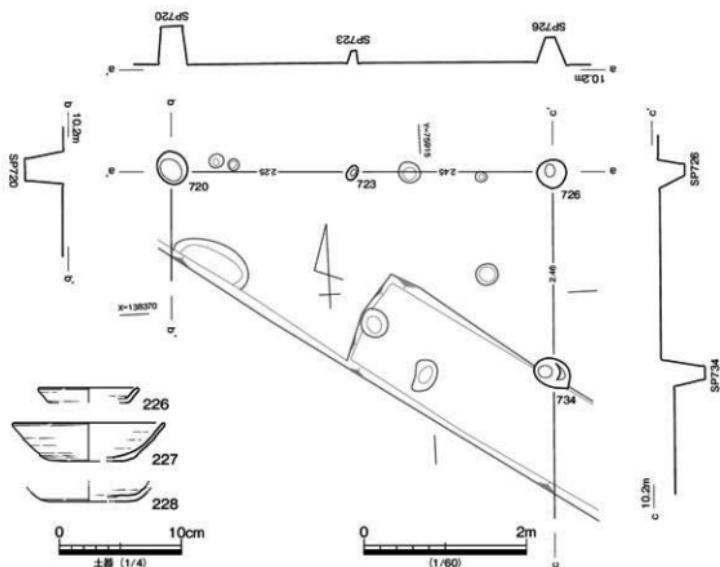
SB18（第37図）

1区中央南端で検出した掘立柱建物である。南半部は調査区外へ延長するため全形は不明。梁間2間(4.69 m)、桁行1間(2.46 m)以上、床面積11.55m²以上、建物主軸N 2.61°Eに配された、南北棟側柱

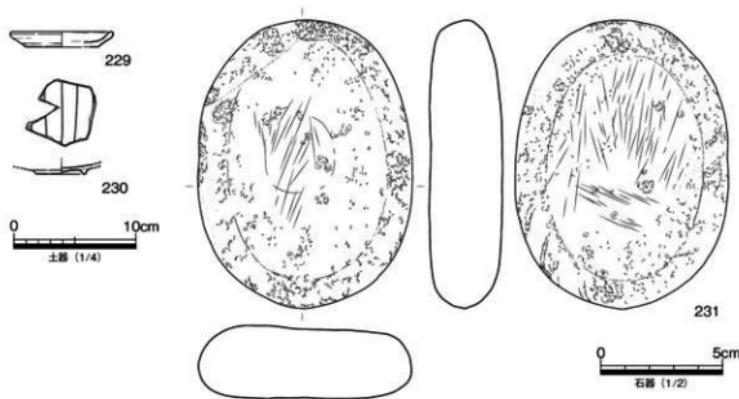
第35図 SB16平・断面・出土遺物実測図







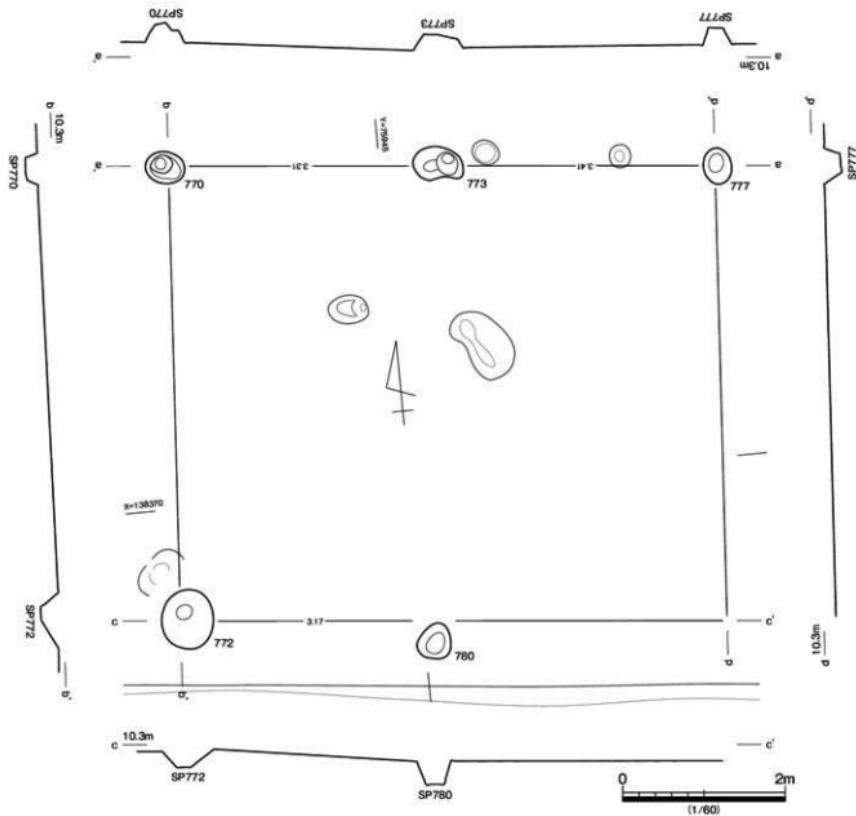
第37図 SB18 平・断面・出土遺物実測図



第38図 SB19 出土遺物実測図

SB19 (第38・39図)

4区北東部で検出した掘立柱建物である。南東隅柱を欠き、梁間の柱間間隔5.59mと長く、課題は残るが復元案として提示する。梁間1間、桁行2間(6.73m)、床面積37.64m²、建物主軸N 84.59°Wに



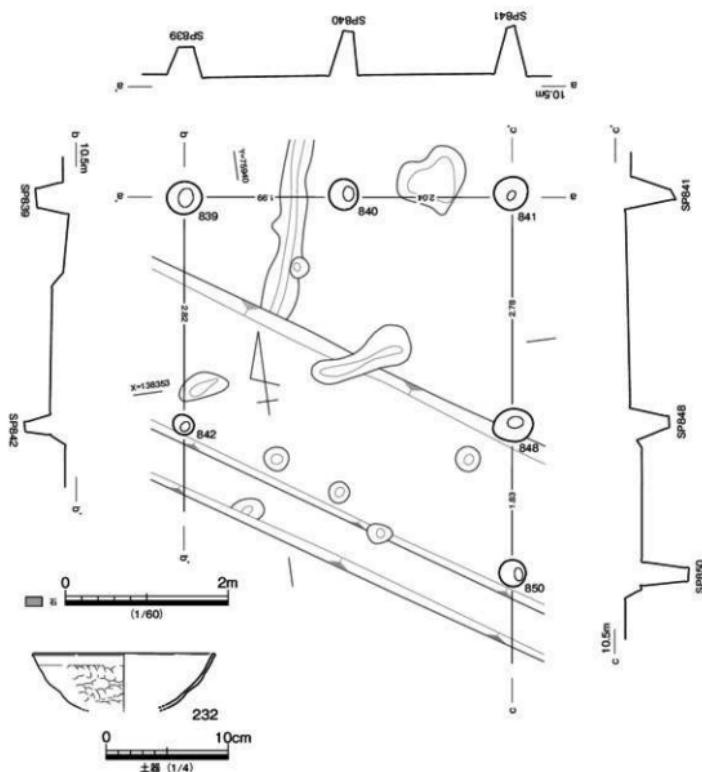
第39図 SB19 平・断面図

配された、東西棟側柱建物を想定する。柱穴は、長径 0.46 ~ 0.73 m の平面円ないしは椭円形等を呈し、底面標高は 9.66 ~ 10.01 m と一定しない。

遺物は、各柱穴より土師質土器等の小片が少量出土している。229 は SP770 より出土した土師質土器皿、230・231 は SP773 出土の和泉型の瓦器碗と砂岩製の磨石である。瓦器碗は尾上編年Ⅲ-2 ~ Ⅲ-3 期に位置付けられ、土師質土器皿も概ねその時期として大過ないものと考えられる。

SB20（第40図）

2区南東端部で検出した掘立柱建物である。南半部は調査区外へ延長するため全形は不明。梁間2間(4.03 m)、桁行2間(4.62 m)以上、床面積 18.58 m²以上、建物主軸 N 7.73° E に配された、南北棟側柱建物の可能性を想定する。柱穴は、長径 0.27 ~ 0.48 m の平面円ないしは椭円形等を呈し、底面標高は 9.58



第40図 SB20 平・断面・出土遺物実測図

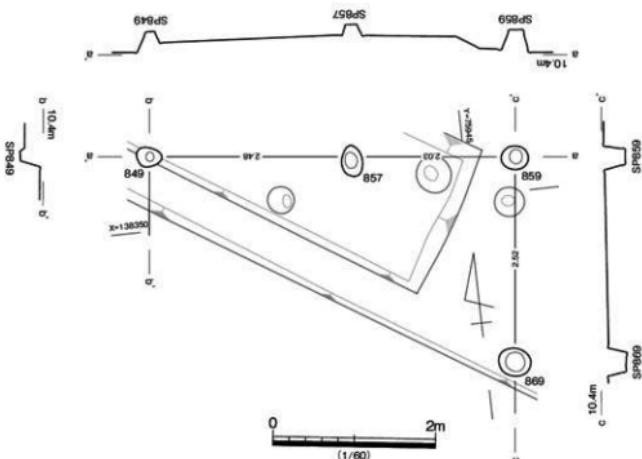
~9.98 mと一定しない。

遺物は各柱穴より、土師質土器等の小片が少量出土している。232はSP839より出土した和泉型瓦器碗。尾上編年Ⅲ-1期前後に位置付けられる。

SB21（第41図）

2区南東隅部で検出した掘立柱建物である。南半部は調査区外へ延長するため全形は不明。梁間2間(4.51m)、桁行1間(2.52m)以上、床面積11.36m²以上、建物主軸N 62.8° Eに配された、南北棟側柱建物の可能性を想定する。柱穴は、長径0.27 ~ 0.40 mの平面円ないしは楕円形等を呈し、底面標高は10.02 ~ 10.11 mと概ね一定であった。

遺物は、器種不詳の土師質土器等の小片が数点出土したのみである。



第41図 SB21 平・断面・出土遺物実測図

柱穴列

一定の間隔で柱穴が直線状に配されるものの、建物遺構として復元できなかったものを、柱穴列として報告する。

SA01（第42図）

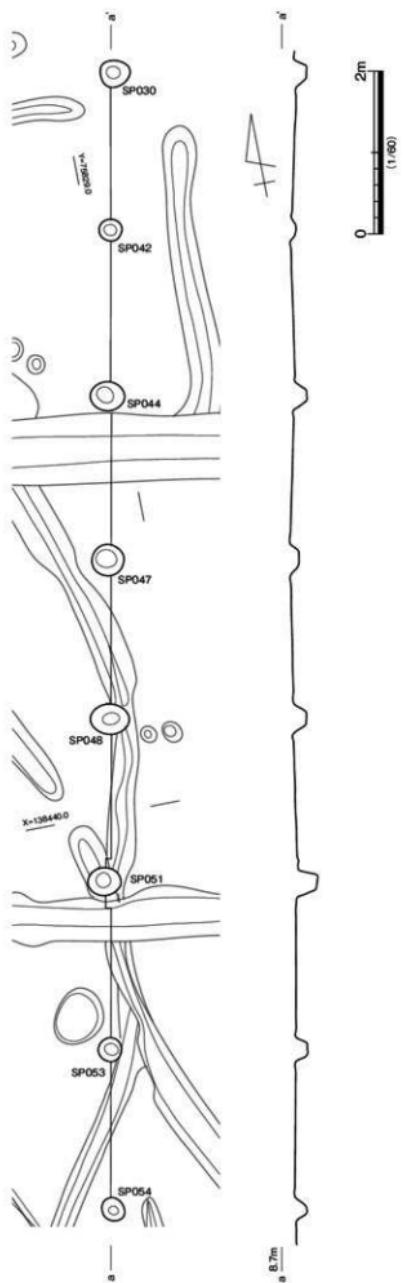
5区中央南半で検出した南北方向の柱穴列である。SD02・03・08・10と重複し、切り合い関係よりSD02・03より後出する。7間（13.96 m）を検出したが、南端は調査区外へ延長する可能性がある。主軸方向N 11.15° Eに配され、SD12と概ね並行する。柱穴は、長径0.25～0.45 mの平面円ないし梢円形を呈し、残存深0.04～0.19 mであった。

遺物は出土しておらず、時期を特定することはできないが、周辺遺構との位置関係や主軸方向より、当該時期の遺構として報告する。

SA02（第43図）

6b区南東隅で検出した東西方向の柱穴列である。6間（7.00 m）を検出した。東西両端の柱穴は、その他の柱穴より相対的に小規模で、また両端よりそれぞれ1間内側の柱穴は逆に規模が大きく、柱間間隔はほぼ均等に配され、より東西には延長しないとみられることから、本柱列を平行北列とし東西両面に庇を伴う掘立柱建物となる可能性が高いが、南側が調査区外となり断定することが困難なため、ここでは柱穴列として報告する。主軸方向N 75.23° Wに配され、SD16と概ね併走し、時期的に近接する可能性が高い。建物とした場合の身舎部分の柱穴は、長径0.27～0.46 mの平面円ないし梢円形を呈し、残存深0.14～0.29 mであった。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難だが、既述したようにSD16との関係より、当該時期の遺構と考える。

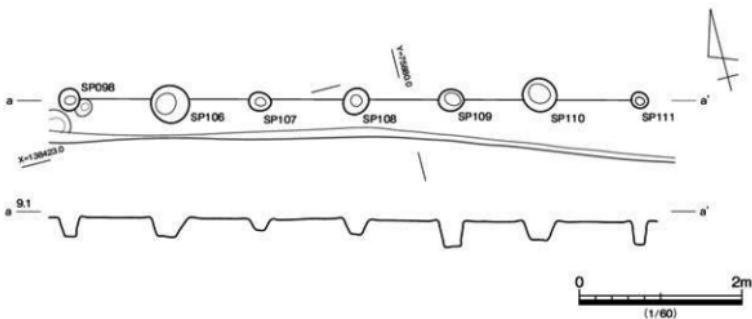


柱穴出土の遺物（第 44 ~ 46 図）

第 44 ~ 46 図に掲載した遺物は、各区の掘立柱建物や柱穴列を構成しなかった柱穴より出土した遺物である。以下では、遺物の内容を記述するにとどめる。個々の遺物の詳細は、後掲の観察表に依られたい。

第 44・45 図は、5 ~ 11 区の柱穴より出土した遺物である。土師質土器皿 233 ~ 246、同杯 247 ~ 272、同碗 273・274、黒色土器碗 275、和泉型瓦器碗 276 ~ 279、青磁碗 280、須恵器壺 281・282、東播系須恵器鉢 283、石器・石製品 284 ~ 288、鉄釘 289・290、鉄滓 291 ~ 296 を図示した。

土師質土器杯を中心に、266 と 268、269 は内・外面、245 では破断面の一部にも煤が付着し、破損後被熱の可能性が考えられる。238・267・270 ~ 272 は完形もしくはそれに近い資料で、地鎮等に伴い意図的に埋納した可能性が考えられる。238 は SP256、267 と 270 は 6b 区 SP090、271 は 9 区 SP187、272 は 10 区 SP268 より出土したが、いずれも地鎮の対象となる建物遺構は指摘できない。274 は土師質土器碗としたが、黒色土器 B 類碗となる可能性がある。280 は同安窯系青磁碗 I -lb 類。砂岩製の台石 284 は、図上面を中心で敲打痕と部分的に擦痕を認める。また、表裏面及び破断面に煤の付着や被熱による変色を認める。285 は方柱状を呈する砂岩製の砥石で、図左 3 面を中心で 4 面を使用する。286 は粘板岩製とみられる砥石で、表裏 2 面のほか、左図右側面も使用痕が認められ、浅く窪む。また、中央で 2 片に破損しているが、表裏面及び破断面に煤が付着する。サスカイト製石錐 287 は、SR01 からの混入資料であろう。チャートの剥片 288 は、火打石として使用された可能性が考えられ、おそらくは徳島県南部秩父帶地域からの搬入の可能性が考えられる。



第43図 SA02平・断面図

第46図は、1~4区の柱穴出土の遺物である。土師質土器皿 297~303、同杯 304~315、同碗 316・317、十瓶山周辺窯産須恵器碗 319、和泉型瓦器碗 320~322、白磁皿 323、同壺 326、青磁碗 324、東播系須恵器鉢 325、土師質土器鉢 327、同足釜 328、須恵器甕 329、鉄釘 330~331を図示した。6点図示した鉄滓は、8・10・11区の柱穴を中心に出土しており、周辺で鍛冶遺構が存した可能性が考えられる。

SP781出土の土師質土器杯 315は完形に近い資料であり、本例も地鎮等に伴う埋納遺物の可能性が考えられるが、具体的な建物遺構との関係は不詳である。和泉型瓦器碗 322は、器表面の炭素の吸着に乏しく、灰白色を呈する。323は白磁皿VIもしくはVII類の小片。被熱のためか釉が変色する。324は龍泉窯系青磁碗I類の体部小片である。東播系須恵器鉢 325は、口縁端部の下方への拡張に乏しく、森田編年第二期第1段階の資料と考える。土師質土器鉢 327の口縁部内面の一部には煤が付着し、被熱の可能性を認める。

土坑

土坑は、調査時に90基以上を検出した。この中には、整理段階で柱穴に改めたもの等も少数あり、必要と認める73基の遺構について以下に報告する。

SK01（第48図）

5区北端部で検出した溝状を呈する土坑である。SD08と重複し、切り合い関係よりSD08より先行する。東端は調査区外へ延長し、全形は不詳。東西5.3m以上、南北1.57~2.80m、残存深0.10~0.15mをそれぞれ測る。埋土等に関する情報は、記録化されておらず不詳である。

遺物は、弥生土器や瓦器の小片5点が出土したのみである。

SK02（第49図）

5区西北部で検出した土坑である。長軸1.3m、短軸0.60mで、平面形は正な隅丸方形を呈する。残存深は0.09mと浅い。埋土等に関する情報は、記録化されておらず不詳である。

遺物は、土師質土器小片1点が出土したのみである。